
B-29の見える夏

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B - 29 の見える夏

【Nコード】

N 2 7 9 3 V

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

「ウチ、倫代ちゃんみたいになりたくないから…」

チヅルの声は弱々しく震えていた。

子供たちは戦火から逃れるために、都会から遠く離れた山奥の寺に疎開している。皆さびしくて、ひもじくて、心細い思いをしていた。

そんな中、倫代が殺された。

数日前、疎開先の裏山に敵国の戦闘機が墜落していた。そのパイ

ロットはまだ発見されていない。じわじわと迫ってくる死の影に、子供たちは恐怖した。

前半

七月の太陽は白く輝いて肌をじりじりと焼く。

雲ひとつない快晴の空はどこまでも透き通っていた。都会から遠く離れた山奥では空が近く感じるのは遮蔽物がないからなのだろう。卓治は小高い丘の原っぱに腰を下ろす。湿った土と植物の香りがした。田舎独特の優しく涼しい風が丘の下から吹き上げてきて、泥でくすんだ彼の白いシャツを靡かせる。

家に残っているお父さん、お母さんは無事だろうか。達郎兄さんはお国の為に立派に戦っているのだろうか。そしてまたいつか家族みんなで暮らせる日が返ってくるのだろうか。卓治はいつもその事ばかりを考えていた。

戦況は悪くなる一方で、ついに国民学校の初等科は全ての授業を停止し一時閉鎖されてしまった。そして初等科の三年から六年は空襲から非難するという名目で遠く離れた山奥の寺に集団疎開をしていた。

どこまでも深く透明で真っ青な空。

そんな青に一機のB-29が白い線を引いて東の空へと飛んで行った。卓治はただ黙ってその灰色の戦闘機が視界から消えていくまで眺めていた。そして風を裂く轟音も聞こえなくなると卓治は大きく伸びをして草の上に寝転んだ。

草を踏みしめる音が風に乗って卓治の耳に届く。

「ごめんなさい、遅かったやんね」

彼の横に屈み込んだもんぺ姿の少女はチヅル。彼女も卓治と同じ初等科五年で、一緒にこの山奥の寺へ疎開して来ていた。

卓治はむくりと起き上がり服に着いた砂粒を払う。

「ええって、毎日チヅルが来んかったら良太も寂しいやろ。あいつホンマに甘えたでお姉ちゃん子やったからな」

そやね、と相槌を打ったチヅルはにつこり笑って卓治の隣に座り膝を抱える。顔だけは上に向けて何度も目瞬きをしていた。そしてチヅルは口から飴玉を落とすように、ぽとりと呟く。

「ホンマに、甘えたな子やったわ」

そして彼女は無理に笑顔を作った。

良太は一つ年下のチヅルの弟で、彼も卓治達と同じく都会から疎開してこの山奥に来ていた。色白で気も弱く、寂しがりな彼は疎開する事を本当に嫌がっていた。出発の朝も「お母さん、お母さん」と泣きじゃくって家の柱にしがみついていたらしい。最後は呆れた父親に「男らしく堂々としろ！」と一喝され半ば叩き出されるようにチヅルと家を出たそうだ。

寺に着いてからも良太は常にチヅルにくっついていて、周りの男子からは馬鹿にされていたが良太はそれでも構わず姉の傍にいた。そして家が恋しくて毎晩しくしく泣いていて、おかげで彼の枕はいつも涙と鼻水でべとべとだった。

そんな良太は先月死んだ。

ある夜、良太は動かなくなってしまうていた。気付いたのは六年の児童で、彼は太急ぎで先生に知らせに行くがその時すでに良太は息をしていなかった。心臓麻痺による突然死だった。

元々身体が弱かった上、急に生活環境が変わってしまった事も要因になっているのではないかと大人達は言っていた。

そんな死因の追及などどうでも良かった。問題なのは良太が死んだという事実。仲間の死は子供達に大きな衝撃を与えた。一番辛かったのは矢張りチヅルだろう。その事件の後、彼女は数日間誰とも口を利かなかった。

彼の遺骨は次の面会の際に親に渡すつもりなのだが、それまでは寺の住職が用意してくれた墓に一時的に納められている。良太の居る墓地は寺から少し離れた林を抜けた所にあり、チヅルは毎日こうして良太に会いに来ているのだった。

「卓治君。毎日付き合ってくれてありがとうね」

チヅルはぺこりと頭を下げた。

「気にするなや。一人でこんな遠くまで来るんなんか怖いやろうし、それに良太は俺にとつても弟みたいなものやったからな」

「そんなん言ってくれると良太も喜ぶわ」

毎日の墓参りにはお決まりの手順がある。まず卓治とチヅルの二人で墓前に立つて手を合わせる。その後、チヅルを残して卓治が墓地を離れて姉弟二人の時間を作つてあげるのだ。その間、卓治はいつもこの丘でぼんやりと空を眺めている。

「お腹減つたなあ」

チヅルは眉を寄せて俯く。

寺の食事は質素なもので毎日少量の米と煮込んだ野菜だけだ。疎開している子供達は牛肉や卵の味などつくの昔に忘れていた。戦況が良くない今、国中どこへ行つても満足に食事のできる所はないのだろう。

そして卓治の顔をじつと見詰めた。

「ウチも男の子に生まれたかったわ」

何で？ と卓治は聞き返す。

「だって男の子に生まれたら兵隊さんになれるやん」

「お、チヅルも飛行機操縦したり、戦艦乗ったり、鉄砲持つて戦いたいんか。女やのに勇ましいやつちゃんあ」

「ちやうねん、と言つてからチヅルは恥ずかしそうに頬を押さえていた。」

「ウチ、頭の上に爆弾落とされたり、鉄砲で撃たれたりするんは恐いで。でもな兵隊さんなつたらお腹いっぱいご飯食べられんねやろ。ウチ、お肉の缶詰食べたいなあ」

確かに軍部の食事は一般人と比べると充実しているらしい。卓治の出征した兄、達郎も手紙で「食事の心配はしないで下さい」と書いていた。

「何あほな事言つてんねん。兵隊さんはお国の為に戦うからお腹いっぱい食べなあかんねん。せやから俺らは我慢せなあかんねん」

「先生みたいなこと言うねんなあ、卓治君って」

チヅルは面白くなさそうに口を尖らせている。そして彼女は物欲しそうな顔をして辺りを見回した。

「何か木の実とかないかな」

「そんなんあつたらもうみんな食べてるって」

「食べられる花とか草とかないんかな。ほら、あれとか甘くて美味しそうとちゃう？ 飴玉みたいなん付いてるし」

チヅルはその小さな指を木陰の茂みに向けた。そこにはしおらしく佇む一輪の白い花があつた。チヅルの言うとおり、その花は小さな飴玉が並んでいるように見える。

「あれは鈴蘭やな。食べられへんで」

「ええ何で、あんなに美味しそうやのに」

「戦争に行った達郎兄さんが言うのとつたんや、鈴蘭には毒があるってな。食べたらず頭がふらふらになつて気持ち悪なんねんで。酷い時は死んでまうらしいで。美味しそうやけど食べたらあかんで」

そうなんや、とチヅルは残念そうに呟いた。その目はまだ甘い毒入りの飴玉を物欲しそうに見詰めている。

大気を震わせる高くて重い音が二人の耳朵に響く。ふと空を見上げるともう一機のB-29が二本目の白線を引いていた。こんな内陸でも堂々と敵国の戦闘機が悠々と飛べるようになったのかと、卓治は少し恐ろしくなる。勢いを増した敵軍と戦っているであろう兄の顔を思い浮かべ胸が締め付けられた。

その時、チヅルは急に立ち上がった。

「もうお寺のみんなの所に戻ろう」

彼女の声はどこか怯えているような色を帯びている。どうしたんや、と卓治が尋ねるとチヅルは上目遣いに林の奥を覗いた。

「ウチ、やっぱりこの山が怖い。卓治君が一緒でもあんまり長いことこんな所にいたくないわ」

それは一週間前の事だった。

あの日、卓治達は震えあがつた。それを見た時、六年達でさえも

腰を抜かした。衝撃で口の利けなくなる女子もいた。

「ウチ、倫代ちゃんみたいになりたくないから……」

そう言ってチヅルは警戒するようにちらちらと林の方を見回している。せやから早く帰ろ、と言う彼女の声は弱々しく震えていた。

倫代という名前を耳にした途端、卓治の背中中は冷たくなった。

「そうやな。帰るか」

卓治も自信なさそうに笑って立ち上がって、二人は時々背後を振り返りながら小走りに帰っていった。

――倫代のようになりたくない。

それは卓治も同じだった。

段々畑の畦道^{あぜ}を抜けて長い石段を上ると卓治達の疎開先の寺がある。

室町時代末期からある由緒正しい寺だと聞いている。しかし古くて抹茶臭い山奥の寺、それは彼らにとって気味の悪いものでしかなかった。

歴史も伝統も、今日食べる物もない子供達には全く無意味だった。満足に食事をとれず、胃薬や歯磨き粉をなめて空腹を誤魔化す者もいる。とにかく何でも良いから口に物を入れたかったのだ。時にはそんな歯磨き粉を巡って争いさえ起こる。腹の足しにならない寺の肩書きよりも一粒の米の方が彼らにとって余程ありがたかった。

寺までの石段を上る卓治とチヅル。

空を覆う木々の間から漏れる太陽の光が彼らの肌に射す度に、彼らは夏を感じた。都会を離れて自然の中で暮らす夏の日、今が平和な時代ならばどれだけ楽しい事だろう。

「よっしゃチヅル、競走や」

卓治はそう言って石段を駆け上がる。この暗くて鬱々とした世の中で、彼は明るく楽しい事を少しでも探そうとしている。そうでも

しないと暗い世界に押し潰されてしまいそうだった。

「ま、待って！」

チヅルもちらりと後ろを振り返ってから卓治の背中を追った。彼女はこの山に潜んでいる怪物を恐れている。その怪物が自分達の後をつけてきているのではないかと不安に思っていた。隙を見せてしまうと怪物はその姿を現し、森の奥へと引き摺り込まれてしまふと信じていた。

卓治の後を追うチヅルは走りながら何度も振り返った。幸い怪物の姿はなかった。しかし、まるで扉が閉じるように来た道を木々が覆い隠していった。

石段を上り切ると石畳の向こうに年季の入った本堂が姿を現す。一度に大勢の子供を受け入れるだけあって、寺は古いがそれなりに大きい。

本堂の傍の井戸で六年の誠太郎せいたろうが水を組んでいる。

誠太郎は二人に気付いてこちらを向いた。卓治に向かって手を上げて彼は優しい笑顔を浮かべた。

「おう卓治。どこ行つとったんや」

「ちよつとチヅルの付き添い」

付き添い、と語尾を上げて復唱する誠太郎は、卓治の隣にいたチヅルに視線を滑らせる。すると彼女は恥ずかしそうに顔を伏せた。

「お前ら二人仲ええな。将来結婚したらええのに」

「アホな事言わんという。俺とチヅルは家が近かったから小っちゃい頃から仲良かっただけやねんで。ほら、見てみ。誠太郎君が変な事言うから、チヅルが赤くなつてもうたやんか」

俯いて足元の小石を弄ぶチヅルの頬は林檎飴のように赤くなっている。

「ははは、おもしろいなお前らは」

誠太郎は爽やかに笑う。

卓治達より一つ上の学年の誠太郎。彼はこの寺に疎開してきた約四十名の児童の代表になっている。班長、それが彼の肩書だった。

誠太郎は学年で一番成績が優秀で、統率力もあり常に皆の中心にいる。卓治やチヅル達下級生の面倒見も良くて慕われている。おまけに背も高く、正義感があって腕っぶりも強い。

だから彼が班長という事に皆納得していた。

「お前ら、チヅルの付添いつて事は…」

「うん。今日も行つてん」

返事した卓治の隣でチヅルも小さく首を縦に振った。

そうか、と言って誠太郎は二人の方を優しくたた敲く。

先月、良太が呼吸をしていない事を初めに気付いたのも誠太郎だった。男子は本堂の板の間に布団を敷いて全員で寝る。良太は家が恋しくて毎晩泣いていたが、その夜は大人しく眠っていた。少しは強くなったと感心していた誠太郎だったが、その寝顔を覗いたときに違和感を覚えた。

いくらなんでも目を開けたまま寝ないだろう。

明らかに普通ではない事を感じ取った誠太郎は慌てて彼の口元に頬を近づけて呼吸の有無を確認した。そして…。

— 先生、良太が息してません！

誠太郎は大急ぎで先生を呼びに行った。

その叫び声に皆は目を覚ました。残された男子達は目を開けたまま眠る良太を囲んで円になっている。誰もが事態を理解出来ないでいる、しかし誰もが事態を想像出来ている。皆は息を飲んで、動かない良太を見下ろしていた。

その時すでに良太は死んでいた。

良太の死因は心臓麻痺だった。もし自分がもっと早く良太の様子を見ていれば良太は死ななかったかもしれない。それが出来なかったとしても、普段からもっと良太を気にかけてやっていたれば何か気が付く事があって、発作を予防する事が出来たかもしれない。

どれもこれも自分が悪い。

班長として至らなかつた所為だ、と誠太郎は自分を責めた。

「あの時、俺がもっとしっかりしてたら良かつてんけどな」

誠太郎を責める者は誰もいない。寧ろあの夜の迅速な行動を見て、更に皆の信頼度が上がった。しかし無力だった自分を誰も責めないという事が誠太郎にとっては生殺しのようで逆に苦痛だった。だからこうして誠太郎は自分で自分を責め抜いた。

「いや、誠太郎君は悪くないねん。俺だけじゃなくて良太の姉ちゃんもチヅルかてそう思ってたんで。それより今度、良太の墓に行つたつてや」

そうやな。誠太郎はそう結んでまた笑った。

「そや、ちよつと暇なんやったら二人に頼みたい事があんなんけど」「どうしたん？」

誠太郎はシャツのボタンを一つ開けて空気を通した。その喉元に汗の滴が一つ二つと流れている。彼は額に滲んだ汗を首に掛けていた手拭いで拭ってから続ける。

「晩飯の支度に使う水を和尚さんの所まで持っていかなあかんねやけど桶^{おけ}忘れてん。悪いけど裏の物置まで取りに行つてほしいねん」

誠太郎は井戸の縁にもたれて言った。

「ええで。晩飯か、今日は何やるな」

食べ物の話になると腹を空かせていたチヅルが隣で目を輝かせる。

「お肉。ウチ、お肉が食べたい」

「それはないやろ。今、肉が食べられるんなんか兵隊さんぐらいしかおれへんで。魚かて滅多に食べられへんねんから」

困った顔をして卓治がそう言うのとチヅルは眉^{しか}を顰めた。

「じゃあ卓治君は何やと思うん？」

「そうやなあ。今朝がゴボウの煮物やったから、夜もゴボウやるな」

「ええ、またゴボウ…」

チヅルは不満を顔全体に表して不貞腐れている。ちよつとお前な、と言おうとした卓治を誠太郎が制する。そして誠太郎はチヅルの名前を呼んで彼女の目を覗き込む。彼は優しい口調で語りかけた。

「なあチヅル。確かにゴボウばつかで嫌かもしれへん。俺もホンマは腹一杯肉食べたいねんで。でもな、今は戦争してるん分かるよな

「？」

「うん、とチヅルは素直に頷く。

「今は国全体で食べ物が少ないんや。だからこの国を守る為に戦つて兵隊さんに沢山食べて貰わなあかんやろ。だから俺らはちよつと我慢や。疎開した俺らはまだマシな方や、都会に残つてたら一日一食あるかないか分からへんぐらいやし、しかも焼夷弾まで降ってくるねんで」

俺らはまだ幸せや、と言って誠太郎はチヅルの頭を撫でた。するとチヅルの顔は茹でダコのように真っ赤になった。

「卓治。ほな、桶たのむわ」

誠太郎は卓治に向かって敬礼した。

「誠太郎少尉、了解しました！」

卓治も敬礼してからにつこり笑った。

「ほら、行くでチヅル」

「う、うん」

チヅルの背中を軽く叩いて、半ば押すようにして物置小屋へと向かった。チヅルは相変わらずその頬を赤く染めて俯き加減に歩いていた。彼女が歩く度に艶のあるおかつば頭がふわふわ揺れる。

もしかするとチヅルは誠太郎の事が好きなのかもしれない。卓治はふとそう思った。

「ごめんなさい、僕が悪いんやったら謝るつて。だからやめて」

物置小屋の壁に押し付けられた正和は身体まさかずの大きい二人の六年に媚へつらび諂つようような弱々しい笑顔を作つて言った。

すると毅つよしはにやにやと笑いながら正和の胸ぐらを掴んで引き寄せる。彼は六年でも一番身体つよしの大きい男子だ。力も一番強く、勿論喧嘩も一番強い。

「根性ないやつぢやなあ。俺はお前みたいな奴が一番嫌いなんや」

毅は正和の頬を拳で殴りつけた。ばちん、と鈍い音が鳴って正和はその場に崩れ落ちる。それを横で見ていた昭夫あきおもいやらしく笑っていた。

「ええぞ毅ちゃん、もっとやったり。根性叩き直したれ」

昭夫は別に身体が大きい訳でも喧嘩が強い訳でもない。ただ金魚の糞のように毅に付いて同じように威張っている。まさに虎の威を借る狐だ。

鼻血を垂らした正和は顔を引き攣らせて二人を見上げる。

「僕が一体何したん……」

すると毅の大きな足が正和の顔を踏みつける。苦しそうに呻く正和を見て二人は愉快そうに笑った。

「別に何にもしとらんわ。俺らはお前を鍛えたってんねんや。ありがたく思え」

毅は倒れている正和の腹を蹴り飛ばした。彼の細い身体がびくりと波打つ。正和の顔は涙と涎よだれと血と泥でぐしゃぐしゃだ。ごめんなさい、堪忍して。正和は何度もそう繰り返している。

「おい、悔しいんか。立てや」

毅に倣ならって昭夫も彼を蹴る。

「痛い。やめて、何でもするからもうやめて」

「やめて欲しいか、じゃあ立てや。俺に拳闘ボクシングで勝ったら見逃したつてもええねんど。男やったらかかってこいや」

拳を固めて構える毅。

「そんなん出来へんわ。お願いやから許してや」

すると毅は冷酷な笑みを浮かべて正和の髪を掴んで無理矢理顔を上げさせる。

「何やこの根性なしは。おい昭夫。ちょっとこいつのズボン下ろしたれ。ホンマにチンチン付いてるか見てみようや」

「それおもしろいな」

太い腕で毅が正和を羽交い絞めにする。彼は手足をばたつかせて抵抗するがどうにもならない。

その時、誰かの足音がした。

二人の六年は怪訝^{けげん}な顔をしてその方を向く。すると物置小屋の角には卓治とチヅルの姿があった。毅が憎々しげに二人を睨みつけた。
「何やお前ら」

迫力のあるその声に卓治は一瞬たじろいってしまった。六年生でしかも力の強い毅は卓治でも恐い。殴り合いになっても絶対に勝ち目がない。しかしチヅルの前だという事もあって逃げる事も出来ずに、ただ彼らを見詰めて立っていた。

「文句でもあんのか」

そう言われても卓治は何も返す事は出来なかった。チヅルも怯えたように立ち竦んでいた。

「卓治……」

半分ズボンを下ろされた正和はまるで捨てられた仔犬のような目で卓治を見ている。卓治に助けを求めているのだろ。喧嘩にはそこそこ自信があった。しかし六年二人、況^ましてや相手が毅となると足が竦む。

「何しに來たんや」

昭夫が毅の後ろから声を荒げて言った。

「いや、俺らは桶取りに來ただけやねん」

「じゃあ早よ持つて行けや」

わかった、と答えて卓治は物置の戸に手を掛けようとした。

ちらりと正和の方に目を遣ると彼は恐怖に染まった瞳で卓治を見上げていた。本当なら助けてあげたいが今回は相手が悪い。自分が首を突っ込んだとしても何も解決できないだろう。ごめんな、と卓治は心の中で呟いた。

「残念やつたな」

毅は正和の髪を掴んで言った。

「あの……やめたってくれへん？」

その言葉が自分の喉を通って出たのだと卓治は俄かに信じられなかった。自分でも何故そんな事を口にしたのか判らなかった。可能

ならば飛び出した言葉を全て集めて口の中に押し戻したい気分だ。

「何やて、お前」

「正和は俺の友達やねん。だから殴ったりせんといったって欲しいねん」

自分で何を言っているのかが分からない。チヅルも真っ青になっている。それ以上に卓治は青ざめていた。

「ええ根性しとるやんけ」

憤怒の表情をした毅は卓治の胸ぐらを乱暴に掴んで物置小屋の壁に叩きつけた。壁を突き破るかのような派手な音がすると同時に、チヅルがきゅと小さな悲鳴を漏らした。

強かに背中を打った卓治の呼吸が一瞬止まって意識が遠のいた。いつの間にか毅の顔が目の前に近付いていた。

「そんなんやったらお前が俺と勝負してみろや」

「いや、そんなんしに來たんとちゃうし……」

卓治の体を押さえつける毅の腕はびくともしない。毅は今にも殴りかかって來そうな顔で卓治を睨んでいる。恐い。中途半端な勇氣を出して正和を助けようとした事を少し後悔さえしていた。

卓治君、とチヅルが震える声を漏らした。今にも泣きだしそうだ。それに気付いた昭夫が、そばかすだらけの顔を歪めて笑った。

「きつとこいつ女子の前やから調子乗つとんねんで。アホやなホンマ。お前みたいな五年が毅ちゃんに勝てる訳あれへんやないか」

昭夫の甲高い声が耳に障る。すると毅は自分の腕力を褒められた事に氣を良くしたのか満足そうに頷いて言う。

「なるほど。ほなここらで俺ら六年の恐ろしさうちゅうもんを教えといたらなアカンみたいやな。二度と舐めたマネ出来へんようにしたるわ」

卓治を掴む腕に更に力が加わる。ボタンの糸が千切れる音がした。「よう覚えとけ、この寺では俺ら六年が一番偉いんや」

そう言つて毅は弓を絞るように右拳を引いた。殴られる。覺悟を決めた卓治はきつく目を閉じて齒を食いしばった。

もうすぐ重く鈍い痛みが襲いかかると思った時。

「毅、やめろ！」

切れ味のある鋭い声が辺りに響く。すると卓治を掴む毅の腕から僅かに力が逃げた。恐る恐る目を開けると物置の角に班長の誠太郎の姿があつた。

誠太郎は形の良い切れ長の目で真つ直ぐに毅を睨んでいる。すると不愉快そうに舌打ちをした毅は卓治の身体を乱暴に投げ捨てるように放した。よろめいて倒れそうになった卓治をチツルが支える。正和も彼らの方に避難して、三人の五年は睨み合う毅と誠太郎を交互に見る。

「なんや誠太郎、お前は関係ないやろ。引つ込んでれや。班長やから言つて調子乗つてんなよ」

「関係ない事ないわ。俺は卓治とチツルに桶取つてきてくれ言つて頼んどつたんや。それで物置の方が騒がしかったから来てみたらこれ（、、）や」

すると毅の顔がより凶悪に歪む。

「お前いちいち鬱陶しいねん、文句あんなやったらお前からどつく（、、）ぞ」

「やつてみるや」

誠太郎はちらりと卓治達の方を振り返つて頷く。もう大丈夫やからな。誠太郎が送つてきた視線にはそんな意味が込められているように思えた。卓治も彼に頷き返すと、誠太郎は再び毅の方へと向き直つた。

しかし相手は毅だ。力が強い上に喧嘩慣れもしている。流石の誠太郎といえども完全に分が悪い。もし一対一の勝負で勝てそうだったとしても、昭夫が横から邪魔をしてくるかもしれない。いざとなつたら卓治も誠太郎に加勢しようかとも考えたが、そんな事をすれば誠太郎の誇りが傷付くのではないかと思つて止まつた^{とど}。

睨み合う誠太郎と毅。まさに一触即発。

今にも殴り合いが始まろうとしている不穏な空気の中、誠太郎は

まるで殺を馬鹿にしたような呆れた溜息を吐いた。

「殺、お前はホンマに懲りんな」

「なんやと……」

誠太郎がさらに殺の神経を逆撫でするような事を言ったかと思うと、以外にも殺は逆に毒気を抜かれたように少し温和しくなった。今にも誠太郎に殴りかかって行きそうだっただけに意外だった。

そのまま二人は睨み合ったままだった。しかしつい先程まであった物々しい雰囲気はなくなっている。

「もうええわ、行くぞ昭夫」

しょうもない、と吐き捨てて殺は誠太郎を押し退けた。待つてくれよ、と情けない声を漏らした昭夫もそれについて行く。

「良い子ぶりやがって」

殺は誠太郎を振り返って再び鋭く睨んだ。

「おい誠太郎。お前、正義の味方ぶってても結局は俺と同じやねんぞ」

そんな言葉を吐き捨てて殺は憎々しげに鼻で笑った。彼らは実に不服そうに小石を蹴飛ばして去って行った。

一息ついた誠太郎はいつもの頼りになる笑顔に戻って三人を見た。
「お前ら大丈夫やったか」

誠太郎は三人の前に立ってそれぞれの顔を見比べる。

「うん、俺とチヅルは何ともないけど正和は殴られてもうたみたいやねん」

「ホンマか。大丈夫なんか、正和」

正和は男子とは思えない程の生白い腕で鼻血を拭う。そして彼は安心しきったように笑顔を見せた。

「大丈夫やで、ありがとう誠太郎君」

「いやいや。最初に止めに入ろうとしたんは卓治やる。礼なら卓治に言っただれや」

「そうやな、ありがとう卓治」

浅く頭を下げた正和は、たらりと鼻血を垂らした。

その様を見た誠太郎達三人は思わず苦笑いを浮かべる。正和もそれにつられて白い歯を見せて笑った。

「とりあえず顔洗いに行けや」

うん、と頷いた正和は一人井戸に走って行った。

誠太郎は今度、チヅルの方を見た。するとチヅルは、はっと息を飲んで真っ赤になって顔を伏せる。

「チヅルは大丈夫やったか？」

「え、あ…うん」

顔を伏せたままチヅルは答えた。

「恐かったやろうに、泣けへんかってんな。偉いぞ」

誠太郎はチヅルのおかつば頭に手を置いた。極限まで緊張しているのか、チヅルの小さな身体は更に小さく縮こまっている。

「ほな、桶持つて行つて、みんなで晩飯の準備手伝いに行こうや。」

もしかしたら和尚さんにつまみ食いさせてもらえるかもしれない。物置小屋から使い込まれた古い桶を引っ張り出した誠太郎は二人に手招きしてから井戸へと戻って行った。チヅルは黙ったまま誠太郎の背中をじっと見詰めている。そのチヅルの真剣そうな様子を見た卓治は思わず吹き出してしまった。

誠太郎は下級生の誰もが憧れ、頼りにしている立派な班長だ。正義感が強く、困っている人がいれば手を差し伸べずにはられない。卓治も誠太郎に憧れているし、チヅルが惚れるのも無理はない。

しかし気になる事が一つだけある。

―正義の味方ぶつても結局は俺と同じやねんど。

穀がそう吐き捨てた時、誠太郎の表情は明らかに強張った。一瞬…ほんの一瞬。見逃してしまうかもしれない程の刹那だったが、それは間違いなかった。

いったい何が「同じ」なのだろうか。

「ほら卓治君、行こう」

いつの間にかチヅルが自分の前に立って振り向いていた。うん、と卓治が気のない返事をする、二人は井戸へ駆け出した。

空には、B・29が引いた白い線が残ったままだった。

夜の七時になると児童達は本堂に集まり、一斉に食事を摂る事になった。

彼らは学年ごと男女別に並べられて、食卓の前に正座する。皆同じような髪形と服装で見た目から彼らの個性を窺う事は出来ない。いや、今この国に個性などというものは必要ない。寧ろ邪魔なのだ。全ての国民が心を一つにして、国の為に身を削る。その為に個人の主張は^{おさ}圧えられた。彼らの容姿はそれを象徴している。

特に女子の髪型は耳を出したおかつぱ頭に統一されていると言っても過言ではない。その中でも一際黒い髪の子ヅルは食卓に上った夕食を見て呟く。

「また、少なくなってる…」

物資が著しく不足しているこの時世、食事と言っても粗末なものだった。その日は、茶碗に半分ちよつとしか入っていない雑炊にゴボウの煮物だけで、肉や魚は決して皿の上には乗らない。育ち盛りの子供達を満足させるような量も無く、誰もがいつも腹を空かせていた。

慢性的な空腹状態に苛まれている彼らは毎日の食事の時間をいつも待ちわびている。量が少ないと言っても、それでも家庭ごとに食事の配給が決められている都会よりもまだまし(、)だった。

チヅルは目の前に配膳された雑炊の湯気をぼんやりと見詰めている。

薄く濁ったこの茶碗の中には何粒の米が入っているのだろうか、もしかしたら指を折って数えられる程しか入っていないかもしれない。

「チヅルちゃん。食べへんの？」

隣に座っている恭子はチヅルの皿に箸を伸ばそうとした。ちよつ

とアカンて、とチヅルは慌てて皿を遠ざけた。

「冗談やんか、ごめんって」

恭子が甲高い声で誤魔化し笑いを浮かべても、チヅルはまだ警戒したように皿を守っている。

「ホンマに取られると思ったわ」

「そんなんせえへんって。お腹減ってんのが自分だけとちやうつてのもちゃんと分かってるし」

そう言つて恭子はゴボウの煮物を一切れ口に運び、何度も良く噛んでいる。沢山噛むとお腹が一杯になった気がする、と住職が言っていたのを思い出してチヅルもそれを真似して雑炊の米を良く噛んだ。しかし五回も噛まない内に口の中には何もなくなった。

「お腹いっぱいご飯が食べたいなあ」

チヅルは溜息を吐いてうつすら底の見え始めた茶碗を覗く。結局、米は茶碗に半分も入っていなかったらしい。チヅルは最後の一口を名残惜しそうに啜^{すす}った。

味の薄い根菜を口に運んで噛んでいるチヅルの膝を恭子がとんと敲いた。

「ほら見て」

恭子は男子達の方に目配せした。チヅルも彼女の視線を追うと、そこには小皿を持って立ち上がる正和の姿があった。

「なんやろ……」

彼は周りをきよろきよろと見回しながら六年の席へと歩いて行く。そしていじめっ子の毅の席で屈み込んだ。彼らの会話がチヅル達の方にも少し聞こえてきた。

「そう言えばお前、ゴボウ嫌いやったよなあ。」

「そ、そうやねん。せやから毅君食べへんかなって思って……」

なかなか気い利くやんけ、と言って笑った毅は一口に正和の分を食べてしまった。その隣で正和が力無い媚びた笑顔を見せていた。

「なんや、もうないんか。じゃあもうどっか行けや。」

毅は邪険に正和を追い払った。その様子を見ていたチヅル達は気

の毒そう顔をする事しか出来なかった。しばらくして恭子が呟いた。

「正和君、また痩せてきたな」

うん、とチヅルは答えた。

正和はゴボウが嫌いな訳ではないだろう。きっと毅に脅されて自分の食事を持つてくるように言われているのだ。

疎開先の寺。この世界で六年の存在は絶対だった。

親もおらず、教師もほとんどいない状況で権力を振るうのは年長者の六年に他ならなかった。腕力の強い彼らの命令は絶対で、下級生は完全な服従を強いられている。特に毅は六年の中でも絶対的な権力を持つていて、まともに意見できる人物も誠太郎ぐらいしかない。

この世界ではいじめは当たり前前の事だった。親恋しい子供達は、その寂しさといつ帰れるのかという不安を紛らわす為、誰かに八つ当たりをする。気の弱い子からすれば疎開地は戦地以上の地獄だった。

「こら、何立ち歩いとんねや！」

その時、野太い怒声が響いた。それまで楽しげに食事をしていた子供達は雷が落ちた時のように肩を竦めて黙り込む。

声の主は赤木だ。

「うわ。正和君、赤木先生に見つかったで」

「よりによってあの赤鬼か……」

チヅルと恭子は上目遣いにその様子を窺っている。赤木はお気に入りの竹刀を片手に正和の首根っこを掴んで部屋の隅に引き摺ってゆく。他の生徒も気の毒そうに見えているだけで何もできない。ただ、毅と昭夫だけがにやにやと笑っている。

壁際に追い詰められた正和はおろおろと狼狽うろたえていた。

「食事中に何をやっとなんじゃ、行儀悪い！」

「ご、ごめんなさい……先生」

赤木は引率の教師の一人で、生徒達からは赤鬼と呼ばれて恐れら

れていた。

鬼瓦のような厳つい顔をした巨漢で、事あるごとに怒鳴り、そして鉄拳による指導を信条としている。軍隊上がりの彼は、生徒達にもその精神を叩き込もうとしていた。

「たるんだるな。よし、今からお前に喝を入れたる。しゃきつと立たんか！」

はい！ と答えた正和は真っ直ぐに背筋を伸ばした。すると赤木は大きく竹刀を振りかぶって正和の尻を打った。

紙風船の破裂するような音が本堂に響き渡り、子供達はびくりと震え上がった。耳を塞いで頭を伏せていたチヅルが恐る恐る顔を上げると、齒を食い縛って声を殺している正和の姿があった。

そして赤木がまさに赤鬼のような顔で他の生徒達の方を向いた。

「ええかお前ら。こうしてる間でも兵隊さん達はお国の為に勇敢に戦って散っていつてるんや。お前らも大きなったら国と天皇陛下の為に命懸けで戦うんや。せやから今からしっかりしとかなアカンねん」

この国は神の国で決して負ける事はない。そんな当たり前事は幼いチヅルでも良く解っていた。国と天皇陛下の為に命を投げ出してでも尽くす事が国民としての最高の誉だという事も知っている。

しかし殴られるのは嫌だ、とチヅルは思った。

「だらけとつたら容赦なく喝入れたるからな！」

赤木は吼えた。

灯りを消すと密度の高い本当の暗闇に閉ざされる。

天井から吊った蚊帳の所為でまるで自分が鳥籠の中に閉じ込められた脆弱な小鳥であるかのように思えてしまう。そしてその檻の先の暗闇の更に先、何も見えない黒の世界から凶暴で醜悪な化け物が自分を食い殺そうと狙っている。チヅルはそう思っていた。

チヅルは闇から逃れるように頭まで布団を被った。布団の中は更なる暗闇なのだが、否応なしに侵食してくる闇に身を委ねるよりは自らが創り出した闇の中の方がずっと居心地が良かった。

彼女は夜が嫌いだった。

正確には「怖い」と言った方が正しいかもしれない。

昼間はあれだけ色鮮やかだった山も、真っ黒に塗り潰されてしまふ。あれだけ賑やかだった友達も皆眠りに就いて動かなくなってしまう。全てが生命を失ってしまう。チヅルにとって、夜とは死だった。

実際、弟の良太が死んだのも夜だった。

チヅル達は男子と違って寺の別館に布団を敷いて寝る。その夜、男子達の本堂が騒がしくなっていてやがて本堂に灯りが燈った。何事かと思つて目を覚ましたチヅル達も本堂に駆けつけた。

そこには冷たくなつた良太が横たわっていた。

皆は気の毒そうにチヅルを見詰めていたが、チヅルだけは呆然と動かない良太を見下ろしていた。

肌は土色をしている。

薄眼を開けている。

涎を垂らしている。

良太が、死んでいる。

まだチヅルが都会で暮らしていた頃、焼夷弾に焼かれて死んだ人を見た事がある。機銃掃射で胸を吹き飛ばされて息絶えた少女も見た。チヅルの幼い瞳には沢山の死が焼きついている。だから良太がもう生きていない事も直ぐに分かった。

それにしても、何故肉親の死体とはここまで存在感があるのだらう。

生きていた頃の彼を知っているからこそ、目の前の良太が死んでいるという事は簡単には信じられなかった。死んでいる事は理解できるが、信じられない。布団をかけてしばらくそつとしておけば目を覚ますのではないかと思っていた。

チヅルは音を立てずに屈み込んで、そつと良太の頬に手を触れた。思った以上でも、思った以下でもない。思った通り良太は冷たかった。思った通りの死の温度だった。

心臓麻痺。それが良太の死んだ理由だった。

チヅルは泣かなかつた、泣きたくなかつた、泣けなかつた。泣いてしまうと良太の死を認めてしまうようで嫌だった。夜は大切な弟を奪って行ってしまった。暗黒の中から伸びてきた真つ黒な手に絡め取られて命を奪われてしまった彼の魂は、今どこで何をしているのだろう。

そして、今日も夜は来た。

良太が死んだ夜以来、夜が来る度にまた一人誰かが死んでしまうのではないか、もしかすると今度は自分の番なのではないか、と彼女は怯えていた。

ずつと布団を被っていて息苦しくなつたチヅルは亀のように顔を出した。

いつの間にか暗闇に目が慣れていて、縁側から入る月光のおかげで室内は意外と薄明るく見えるようになっていた。狭い夜空には宝石箱をひっくり返したように星が散らばっている。耳を澄ませば虫の声や、風に木々がざわめく音、周りの子の寢息も聞こえてくる。夜も意外と賑やかだった。

その時、耳元で名前を呼ばれた。

チヅルは思わず叫びそうになつたが、聞き覚えのある声だったので直ぐに冷静を取り繕えた。

「チヅルちゃん、まだ起きとつた？」

隣で寝ていた恭子だった。冷静に対応出来てはいるが、まだ鼓動が収まらず喉まで響いている。

「どうしたん？」

「暑くて寝られへんねん。ちょっとだけお話しせえへん？」

チヅルもあの夜以来、毎晩眠れない。チヅルは横になつたまま小さく頷いた。すると恭子はこそこそとチヅルの布団に移ってくる。

「暑くて寝られへん言うてるけど、一緒に布団入ってたら余計暑いやん」

そう言いながらもチヅルも嬉しそうだ。真っ暗で孤独な世界では友達というの存在はこの上なく心強い。背中合わせに寝転ぶ二人。

「なあ、チヅルちゃんも寝られへんかってんやろ？」

恭子が言葉を発するたびに音の粒の振動が背中を伝う。傍に誰かが居る、そんな安心感がチヅルを満たした。

「うん、ウチも寝られへんかった」

「やっぱりな。また良太君の事考えててんやろ」

彼女の言葉にチヅルの心臓が跳ねた。恭子にも背中越しに鼓動が伝わっているかもしれない。

そう、良太の事が歯痛のように毎晩付き纏う。

良太という肉親の死は強烈だった。寝ても覚めてもその事ばかりが頭から離れない。周りに気を遣って立ち直ったふりをするのが大変だ。

「今日も良太君の墓参り行つてたやろ、卓治君と」

「そやで、良太も寂しがるからな」

本当は自分が寂しいのだ。でもな、と言ってから恭子は少し躊躇ってから次の言葉を口にした。

「でも…あんまり行かん方がいいと思う」

恭子はそう言つて黙つた。チヅルの胸の中にぐると泥水が渦巻き始める。恭子が言いたい事は何となく分かるからだ。

「それって、卓治君と一緒にでもアカンかな…」

「うん。だって倫代ちゃんみたいに…なりたくないやろ」

恭子が深呼吸したのが背中を通じて分かった。彼女も倫代の最期の姿を頭に浮かべてしまったのだらう。チヅルも倫代の事を思い出して寒くなった。

六年生だった倫代は、肌も白く髪も艶つぱく笑顔も可愛らしかった。下級生の面倒見も良く、誰もから愛される優しさを持っていた。特に女子からの人気が高く、倫代の周りにはいつも彼女を慕う児童

が集まっていた。

良太の事でチヅルが泣いている時も倫代は優しく頭を撫でてくれた。チヅルは恥も外聞も忘れて倫代にしがみ付いて思い切り泣いた。この国で死は当たり前だ。数秒後、肉親が死ぬ事もあり得る。彼女はこの地獄のような世界で必要不可欠な存在だった。

しかしもう、倫代の事を語る時、過去形で語らなくてはならない。五日前、倫代は死んだ。

殺されたのだ。

朝起きると倫代の布団が空だった。早起きして洗濯でも手伝っているのかと思つたが、住職に聞いても「今朝はまだ見ていない」と言う。倫代はどこにもいない。心配になって皆で辺りを探し回った。彼女は森の中に変わり果てた姿で居た。

畦道から少し外れた森の中で無残にも打ち捨てられた彼女を見て誰もが目を背けた。倫代の死体は服を着ていなかった。その白い素肌には擦り傷と打撲の跡が無数に残されていて、その瞳は苦痛と恐怖を張り付けて開かれたままだった。

恐らく何度も乱暴されたのだろう、苦痛に耐えて食い縛った口唇からは赤黒い血が流れ乾いていた。美しかった髪もばさばさに乱れ、露わになった膨らみかけた白い乳房も泥に汚れている。そして、大人の腕程の太さがある木の枝が性器に突き立てられていた。

美しかった倫代は命と、女性としての尊厳までも奪われていた。

チヅルは蓆むしろに包まれた倫代を思い出して背筋が凍った。

「知ってる人が死ぬんはもう嫌や。良太君だけじゃなくてチヅルちゃんまで死んでもうたらウチもう耐えられへん」

分かった、氣い付ける。チヅルは呟く。

「それにしても一体誰があんな酷い事したんやろ」

チヅルがそう言うと、恭子は憎々しげに答える。

「そんなん決まってるやろ、アメリカや！」

「何でアメリカなん？」

「チヅルちゃん、忘れたん？」

あつ、と漏らしてチヅルは思い出した。

先日、アメリカの戦闘機がこの山に墜落した。物凄い轟音に驚き、チヅル達も寺の外に飛び出したのを覚えている。

軍服を着た憲兵も沢山来て森の中を搜索したが、それでも敵パイロットはおるか、墜落した機体すら未だ見つからない。つまりこの山にはまだ戦闘機に乗っていたアメリカ兵が潜伏している可能性があるという事だ。

その飛行機が墜落したのは倫代が殺された日より少し前だった。だからそのアメリカ兵が倫代を強姦して殺した。恭子はそう考えている。

「誰か…またアメリカに殺されてしまふんやろうか」

チヅルは泣きそうな声で言った。

彼女の中での外国人のイメージは身体が大きく、青白い肌をしていて、怪しい言葉を使う。そして目の色は灰色で情け容赦なくこの国の人々を殺す、鬼そのものだった。

「こうやってみんなで固まってたら大丈夫。相手は一人やし」

「でも倫代ちゃんもみんなと寝てる時におらんようになってん」

恭子はしばらく黙り込んだ末、

「それでも一人で居るよりよっぽどマシやわ」

と、答えた。

その時、すうと障子の開く音がした。

チヅルと恭子は息を飲んだ。

―誰か来た？

―うん、多分せやけど誰が？

こんな時間に誰が来たのだろうか、まさか本当に森を彷徨うアメリカ兵が今夜の生贄を探しに来たとも言うのだろうか。背中越しに二人の鼓動が伝わり、お互いがお互いの不安を煽る。

それは歩く度に板張りの床を深くしならせ、ぎしりぎしりと軋ませる。恐らく男の足音だ。この別館で寝る女生徒ではない。

生徒ではないならば…。

足音は蚊帳をめくって更に近付いてくる。本能的に危機を感じた彼女達は布団を顔まで被って隠れた。そしてお互い向かい合い、手を握り合って震えている。

三步進んで五秒止まる、三步進んで五秒止まる。足音はその調子リズムを繰り返している。枕元に立って眠っている少女達を物色しているように。あの夜も、こうして倫代は選ばれてしまったのだろうか。ぎしりぎしり。足音はどんどんチヅル達の布団に近付いてくる。

チヅルは恐怖のあまり思わず恭子の身体に抱きついた。すると驚いた恭子は「ひゃっ」と短い悲鳴を上げてしまった。

足音がぴたりと止まる。

…まずい。

恭子は口を押えて息を殺す。すると足音は迷う事なく真っ直ぐに彼女達の方へと近づいてきた。チヅルはひしりと恭子にしがみ付いている。恭子の線の細い身体からは壊れてしまいそうな程の大きな鼓動が律動的に響いていた。

殺される。

チヅルの脳裏に死が過った。そして、足音が彼女達の枕元で止まった。じつと見下ろされている感覚がある。そしてついに二人の布団が捲られた。

あまりの恐怖に声すら出ない。チヅルと恭子は目に涙を浮かべながら枕元に屈み込んでいる男を見上げている。それは噂に聞いていたアメリカ兵、ではなかった。

「何してるんだい、君たち」

それはもう一人の引率教師、今村だった。

今村先生…とチヅル達は抱き合ったまま呟く。そんな様子を見ていた今村は、ずれた眼鏡を直しながら困ったような顔で笑った。

「ここはチヅルの布団だろ？ どうして恭子も入ってるんだい？」

「そ、その。チヅルが暗いんが怖いって言うから」

ウチそなん言ってへん、とチヅルが言つと今村は再び困ったような表情で二人の顔を見比べた。

今村は他の教師とは違った。いや、他の大人とは違った。東の地方出身で言葉遣いが違った事もあったが、もっと根本的な何かが違う。他の大人、特に赤木は「国の為に死ぬ事が国民としての最高の^{ほまれ}誉」と主張し、子供達にも厳しく接する。

しかし今村は「生きて未来に繋ぐ事」を子供達に伝えようとしている。この時勢では禁忌とも言えるその考え方だが、チヅルは好きだった。大人は皆、国家総動員で国に尽くせと言う。それが間違っているとは思わないが、矢張り死ぬのはこわい。

「心配いらないよ」

今村は恭子の頭を撫でながら言った。

「こんな山奥に爆弾なんて落とされないよ、だからここは安全さ。町に残ったお父さんお母さんだつてきつと大丈夫。兵隊さん達がこの国を守ってくれるから」

薄暗く凝った闇の中で、今村の落ち着いた優しい声は良く響く。

「ウチら、このままずっとお寺で暮らすんかなあ…」

チヅルが心細そうにそう漏らすと今村は、今度はチヅルの頭にぽんと手を置いた。

「きつと帰れる、今までの生活に」

戦況はかなり悪化していて敗色濃厚というのは誰も口には出さないもののチヅルのような子供の目にも明らかだった。もし戦争に負けると、全てを奪われる。

この小さな島国国家は今まで数十年に渡って大陸での戦いに勝ち続けてきた。そして負けた国から全てを奪い支配して豊かさを得てきた。だから分かっている、負ければこの国はこの国でなくなってしまう事を。

元の生活に戻れるという今村の言葉に何の根拠もない。しかし彼の言葉はチヅル達を安心させた。チヅルは今村の目を見て小さく頷くと、彼も優しい笑顔で返してくれた。しかし同じ布団に潜り込んでいる恭子はまだ表情に不安の影を残している。

「先生。ウチはアメリカがこわい…」

恭子は小さな声で言った。アメリカが、と今村は聞き返す。

「だってこの山に落ちてきたアメリカがまだ森の中に隠れてんねやる。あの夜、倫代ちゃんはおらんようになってた。きつとアメリカに連れ出されたんや。それから、倫代ちゃんは……」

殺されてしまった……。

彼女はそう結んで押し黙った。その二つの瞳は真っ直ぐ今村に向けられたままだった。

「確かに、まだ森の中に潜んでいるかもしれない。倫代をあんな目（、、、）に遭わせたのも恭子の言うとおり、その敵の兵隊だろう。でも夜は僕らがこうして見回ってるんだし、相手がいくら兵隊だってこっちは沢山味方がいるんだ。もう簡単には連れて行かせないよ」

赤木先生もいるんだしね、と付け足して今村は冗談ぽく笑った。

彼の言うとおり軍隊上がり赤木なら、たとえ相手がアメリカ軍だとしても取り押さえてしまいかもしれない。普段は恐ろしい赤鬼もこの状況下では心強い。

「僕は女子部屋の見回りさ。ちなみに男子部屋の見回りは赤木先生だよ」

赤鬼じゃなくて良かった、とチヅルは思わず口から漏らしてしまいそうだった。チヅルはどうも赤木が苦手だ。怖い赤木の事を慕っている生徒は一人もいないだろうが、チヅルは特に毛嫌いしていた。根っから性格が優しいチヅルは「暴力」というものに拒絶反応が出る。

この寺に来た頃、弟の良太は毎日のように発作的に「家に帰りたい」と言って泣いていた。チヅルはいつも頭を撫でて彼を宥めていた。

それを見ていた赤木は獣のように低く唸りながらチヅルから良太を取り上げた。突然の事にチヅルは声も出ない。良太も訳も解らず泣くばかりだ。

―バカモン！

床が揺れるかと思う程の怒鳴り声が聞こえたかと思うと、バチンと鈍い音がした。良太が板張りの床に崩れ落ちている。殴られたという事に気付いたのはその時だった。すると赤木は良太の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせた。

―お前、それでも日本男児か！

もう一度怒鳴って、更に拳を良太の頬に叩きつける。

―何泣いとんねん、情けないんか。

―お前がびーびー泣いてる間も、兵隊さんはこの国を守る為に戦ってんねんぞ。

―お前みたいな奴の為に命かけて戦ってんねんぞ。

泣き止まんか、と怒号を上げながら赤木は何度も良太を殴った。

チヅルはどうする事も出来ずにただ狼狽うろたえていた。目の前で繰り広げられている凄惨な暴力に手も出ず、足も出ず、声も出ず、ただ涙だけが出た。

泣き喚く良太と目が合うたびに胸が締め付けられた。そして十才にも満たない子供に容赦なく拳を浴びせる赤木という人間に非道ひどく嫌悪感を覚えた。

それ以上嫌な記憶が逆流してくるのを遮断させるように、今村の落ち着いた声が頭上からした。

「じゃあ明日も早いからね、もう二人ともそろそろ寝なさい。今夜はそのまま二人で寝ても良いから」

そう言って彼は二人の頭を撫でてから立ち上がった。

目を閉じると今村の足音が静かに遠ざかってゆき、障子を開けて部屋から出て行くのを感じた。障子が閉まると辺りは再び夜の深い静寂に包まれた。

チヅルは布団に潜り込む。

…きつと帰れる、今までの生活に。

ふと今村の言葉を思い出した。可能性は低いが、戦況が引っくり返ってこの国が戦争に勝利したとしよう。そうすればこの国はこの国のままでいることが出来る。すると今までの生活は戻ってくる。

しかしチヅルにだけは「今までの生活」は戻ってこない。
何故なら、死人は帰ってこないのだから。

八月にもなると朝でも日差しが鋭い。

卓治達は赤木が怒鳴り込んで来る前に手早く布団を片付け、揃って朝食の準備に取り掛かっていた。チヅル達女子も本堂に集まってきた皆で配膳する。

せわしなく動く子供達の中、卓治はふと立ち止まって開け放たれた障子の向こうを眺めた。僅かに開けた境内の向こうにはどこまでも森が広がっている。自分はその緑色の壁に閉じ込められているのだと改めて感じた。湿った生暖かい風が本堂に吹き込んでくる。青臭い匂いがした。

今朝の食事は雑炊だけ。いよいよ食べ物がなくなってしまうのかと誰もが絶望を覚えた。卓治は味のない雑炊をじつくりと口の中で何度も噛む。以前、咀嚼指導が入り「良く噛めば空腹が治まる」と赤木が言っていた。しかし絶対的な食事量が少な過ぎて、その通りやっても流石にもう誤魔化しきれない。

贅沢は敵だ。大人はそうに言うが、贅沢などしていない。むしろ贅沢とはどのような事を言うのかすら忘れてしまった。今の彼らには贅沢どころか必要最低限のものさえなかった。

雀の涙ほどの食事を平らげると彼らは境内に出て毎朝のラジオ体操をする。男女別背の順に並び、三十数名の子供達が一糸乱れぬ動きでラジオに合わせる。

雑音混じりのラジオから淡々と流れる音楽、竹刀を持って子供達の前に立つ赤木。これらを目で見ても耳で聴くと、良い意味でも悪い意味でも今日も一日が始まると実感する。今日も死にませんように、と彼らは胸の中で祈る。

彼らにとって死はあまりにも現実的だった。

今日、食べ物がなくなってしまうかもしれない。今日、この山にB-29が焼夷弾を落としてくるかもしれない。そして。今日、森に潜むアメリカ兵に連れて行かれるかもしれない。

彼らの胸は様々な死の恐怖でいっぱいだった。

体操が終わってもラジオはそのまま流れていた。娯楽番組など放送していない。流れるのはいつも戦争の事。神国は負けない。ラジオでもそう言っているが、子供達は自分達の食べ物の事を考えて何となく悟っていた。

背筋を伸ばして立っていた赤木の目から涙が流れた。

「あれ、赤鬼泣いてへんか」

正和はそつと卓治に耳打ちした。

「ホンマやな、どうしたんやるか」

「赤鬼の目にも涙やな」

そう言ってお道化^{どけ}てみせる正和。聞こえたら殴られんぞ、と言いながらも卓治も笑ってしまった。すると二人は後ろから肩を敲^{たた}かれた。卓治達はびくりと身体を引き攣らせる。恐る恐る振り返るとそこには今村がいた。

いつも優しい笑顔をしている今村とは少し違った。眼鏡の奥の瞳は厳しい光を宿して二人にじつと向けられている。

「卓治、正和…何を笑っているんだい？」

穏やかではあるが厳しい声。

卓治はその勢いに押されて何も答えられない。それでも今村は黙ったまま彼らを見詰めている。とうとう重圧に耐え切れなくなった二人は逃げるように俯いてしまった。

すると今村は二人の頭に優しく手を置く。

「赤木先生が何で泣いているか分かる？」

分かりません、と申し訳なさそうに答える正和。

「あれだよ」

そう言つて今村は、赤木の後ろにあるラジオを一瞥する。

「君達には難しくて分からないかもしれないけれど、今ラジオはと

ても大事なことを話しているんだ」

「大事なこと？」と卓治。

「神風特攻隊の話だよ」

その言葉に聞き覚えがあった。正和も知っていたらしく、彼は漸く口を開く。

「カミカゼって確か、戦闘機で敵の軍艦に体当たりする…」

そう、と今村は首肯した。

「今日も沢山の若い兵隊さんが神風特攻隊として戦闘機に乗るんだ」

「でも軍艦に体当たりなんかしたら一緒に死んでしまうやん。兵隊さんは死ぬのが恐くないんかな？」

「恐いに決まってるじゃないか」

正和の目を見て今村が答える。

「それでも死ぬ事よりも恐い事があるんだ。それは誇りを奪われる事。戦争に負ければ例え生きていたとしても兵隊は奴隷にされてしまう。生きて誇りを奪われるよりも、死んでも誇りを守る。そう思っ

って飛行機に乗るんだ」

「誇りの為だけに死ぬるん？」

「違うよ。もつと大事な物の為に神風特攻隊は戦うんだ。それはこの国の未来の為、つまり…」

君達だ。と今村は力強く二人の目を見る。

「赤木先生が兵隊だった事は知ってるね？ 今は退役したけど特攻部隊には赤木先生のかつての戦友もいる」

赤木は涙を拭う事もせずに、西の空に向かって敬礼をしている。

「国家のために命を散らした若者達の英霊は軍神として未来永劫この国に祭られる事になるんだ。確かに命は無駄に捨ててはいけ

けれども命を捨ててでも守るべきものもあるんだよ」

音の割れたラジオの音がいつまでも鳴っている。

卓治の兄、達郎も帝国空軍に所属している。もしかすると、兄も神風特攻隊としてこの国の未来の為に命を賭す時が来るのだろうか。兄も軍神になる日が来るのだろうか。

「じゃあ算術の授業までは自由時間だから顔でも洗ってきなさい。
目ヤニが付いてるぞ、卓治」

そう言って今村はいつもの優しい笑顔に戻って去っていった。

卓治にはもう一つの日課がある。昼になると暑くなるので、まだ涼しいこの時間に行っておきたい。

辺りを見回して探すと井戸の傍にチヅルは居た。

彼女はじっと一方を見ている。その視線を辿っていくと、その先には誠太郎の姿があった。彼女はぼおとしながら遠くから誠太郎を見詰めている。

「チヅル！」

卓治が声を掛けると彼女の小さな身体はぴくりと震えた。

「あ、卓治君！おはよう」

チヅルは取り繕ったような笑顔で卓治の方を向く。

「おう。そろそろ行こか」

今朝も二人は良太の所へ行く。

太陽は高く昇る。

いつものように卓治は一人丘に寝そべって透き通る青空を眺めていた。今日もB - 29が白線を引きながら空を切ってゆく。

真つ青な夏の空に白波のように線を引く戦闘機の姿は敵国のものながら美しかった。しかし、あの戦闘機のパイロットは今までどれだけの人の生活を焼き払ったのだろうか。青と白の美しさの裏に潜む黒色は卓治の胸を締め付けた。

森の入り口に咲く鈴蘭も良く似ている。

乳白色の花弁、小さな鈴のような慎ましさと佇むその花。しかしその細い身体に甘い毒を宿している、生命を消してしまう程の。

卓治が立ち上がると眼前の木々の背丈が縮んで麓ふもとの村が小さく見える。所々にある田圃たんぼで手拭を頭に巻いた人が農作業をしている。

あそこで穫れた米の殆どは国に持って行かれてしまうのに、あの人達は何故働くのだろうか。

その時、西の空が赤く燃えた：ような気がした。

ふと卓治がその方角に目を向けると、いつの間にか雲が浮かんでいた。不純物のない快晴の空に突然現れた、今まで見た事もない形の雲。あれはなんだろう。卓治の胸がざわめいた。

森の奥から騒がしい足音が聞こえた。

チヅルのものだろうが様子がおかしい。いつもの彼女はもつとのおんびり歩いて戻ってくるのに、その足音には恐れ of 響きが含まれている。すると真つ青になったチヅルが飛び出してきた。

今にも泣き出しそうな顔でチヅルは丘を駆け上がった来る。

「どうしたんや」

問い質してもチヅルは息を切らして何も話せない。それでもふるふると震える口唇から必死に言葉を紡ごうとして卓治の目を見詰めている。

彼女の額からじわじわと汗が噴き出してくる。荒い呼吸混じりに卓治君、卓治君と何度か繰り返した後、チヅルは漸く言葉を漏らした。

「おった…」

「何がや？」

「森の奥に誰かおったんや！」

そう言うときチヅルは卓治の手を引っ張り帰ろうと促す。森の奥に誰かがいたと言われると、どうしても例のアメリカ兵の事を連想させられる。もしチヅルが出会ってしまったら、どうなっていたのだろうか。

二人は足早に山道を歩き、寺に戻る。歩いても歩いても深緑色の迷路から抜け出せず、いつもより帰り道が遠くなったような気がした。それに後ろから何かが迫ってくるような不安感もじわじわと背中を舐める。

チヅルは落ち着かない早口で話し出す。

「あのな。お墓の奥の森でさがさって音してん。イノシシかなって思ってたんだけど、何か違うような気してん」

そこで呼吸を一つ置くチヅル。

「それでな。思い切って『誰?』って聞いてん。そしたら…がさがさって音がすごい勢いで近付いて来てん」

きつとアメリカやで、とチヅルは付け足した。それで大慌てで逃げてきたらしい。その話を聞いていて卓治も恐くなってきた。喧嘩に自信がない訳ではないが相手は敵国の兵隊でもしかするとピストルも持っているかもしれない。勝ち目はない。それに倫代を辱めて殺している。捕まったら何をされるか分からない。

卓治は無言でチヅルの顔を見ると、彼女はまだ青褪めた顔をしている。目の端に涙を溜めて、そのふつくらした頬も血の気を失っていた。

そして、チヅルは不意に立ち止まる。

「何や、急に」

卓治の問い掛けには応えず、彼女は急に辺りを見回し始めた。木々の葉が風に揺られて一斉に騒ぎ出す。

「静かにして!」

チヅルは俯いたまま叫んだ。チヅルが声を荒げるのは珍しい。気圧された卓治は口を開けたまま押し黙った。そして彼女は静かに続ける。

「聞こえへんの?」

何を言っているのだろう。卓治は怪訝そうに耳を澄ますが、それでも聞こえてくるのは葉が擦れるさざ波のような音だけ。

いや、違う。

緑のさざ波の裏側に違う音が入り込んでいる。

誰かがこちらに近付いて来ている足音、それもどんどん大きくなっている。瞬時に危険だと判断できた。

「チヅル!」

卓治はチヅルの手を取って弾かれたように駆け出した。

後ろから何者かが走ってくる、アメリカ兵だ。アメリカ兵が追いかけてきた。卓治に手を引かれるチヅルはひいひいと鳴き声混じり

の息を漏らしながら必死に山道を駆けた。伸びた草で手足を切つてもお構いなしにチヅルは走った。

足音は更に迫ってくる。

チヅルはぼろぼろと涙を零しながら卓治の名前を呼んでいた。二人は途中何度も転びそうになりながらも必死に走る。

「絶対に振り返んなや、捕まったら殺されるで！」

大きく頷くチヅル。殺されるという言葉に更なる恐ろしさが彼女の脳裏に沸き立った。卓治も蓆に包まれた倫代むしろのあの姿を思い出して背筋が凍った。走る事を止めてしまえば自分達も倫代と同じように玩具のように弄もてあそばれた末に惨たらしく殺される。

死にたくない、こんな所で死にたくない。

卓治はチヅルの手をしっかりと握り直した。その手を彼女も強く握り返してくれた。この手を放してしまえばチヅルは殺される。自分の手にチヅルという一人の女の子の全存在がかかっている事を胸に刻みながら卓治は駆けた。

それでも大きな足音はみるみる内に近付いてくる。相手との距離はもう五メートルもないと思う。卓治は一瞬死を覚悟した。

そしてチヅルがけたたましい悲鳴を上げたのと同時に彼女の手に重みが加わった。チヅルが捕まった。

チヅルを返せ！

確かにチヅルを犠牲にして逃げてしまえば自分だけは助かる。しかしその時、アメリカ兵に辱められて殺されるチヅルの姿が脳裏を過った。幼い頃から一緒にいた彼女を死なせたくない。卓治は振り返ってアメリカ兵に立ち向かおうとした。

右足で地面を蹴って立ち止まった卓治は拳を握りしめて振り返る。「放せやアメ公！」

卓治は追ってきたアメリカ兵の腹に拳を叩き込んだ。

しかし鍛え抜かれたその腹筋は彼の攻撃をいとも簡単に跳ね返した。そして更に悪い状況に彼は気が付いた。

それはアメリカ兵ではなかったのだ。

「何さらしとんねんボケ！」

赤木だった。彼は恫喝と共に卓治の頭に拳骨を見舞った。卓治はあまりの衝撃に眩暈を起こしてその場に蹲った。自らの頭を摩りながら辺りを見回すと、最初に目に入っただのはその場に座り込んでひくひくと嗚咽を上げているチツルの姿だった。更に続く赤木の怒鳴り声。

「お前ら何しとったんや！」

仁王立ちの赤木は厳しい目で二人を見下ろす。

「良太の墓参りでチツルに付き合ってたんです。それで誰かが追いかけてきたから、この前墜落した飛行機に乗ってたアメリカやと思っただんです。赤木先生やって分かんかったん」

涙を拭うチツルもこくりこくりと何度も首を縦に振って同調した。すると赤木も低く唸って頷いた。

「そうか。じゃあアメ公やと思ってワシを殴った訳やな」

「そ、そうです」

赤木はしばらく黙ったまま卓治を見下ろしている。そして彼の肩を強く叩いた。加減の利かない赤木の馬鹿力で卓治はよろめく。おずおずと顔を上げると赤木はどこか満足げに頷いていた。

「お前なかなか根性が座つとるな。それでこそ我が神国の男児やぞ」
無精髭を生やした赤木は豪快に笑う。良く解らないが褒められているらしい。別に相手がアメリカ兵だと思っただけから殴った訳ではない、チツルを助けるために無我夢中だったただけだ。

「先生こそ何してたんですか？」

「ああ、最近物騒やろ。お前が言っただようにアメ公が隠れてるやもしれへん。せやから見回りしとったんや」

もし見つけたらワシがとっ捕まえたるわ。そう言っただけで赤木は自らの太い腕を自慢げに見せつけた。

「おい、そろそろ戻るぞ」

赤木はチツルを立たせた。

「それにしてもさっきから西の方にある灰色の雲は何やるな」

腕を組んだ赤木は首を傾げながら言った。その雲とはついさつき卓治が見ていたものを指しているのだろう。

卓治とチヅルは赤木に付き添われて寺に戻った。そこにはいつもと変わらない閉鎖空間の中だけに約束された平和があった。

誠太郎が井戸で水を汲み、毅が下級生をいびり、住職が本堂の仏像の前で手を合わせて瞑想しているいつもと変わらない平和な世界。死とは縁遠い安全な閉鎖世界。だがこの日はいつもと違う事が一つだけあった。

恭子がいらない。

恭子は夜になっても帰って来なかった。

夕食はいつものように粗末なものだった。

流石に毎日僅かな米と木の根っこの煮物のようなものと辟易としてくる。肉や魚が食べたい。それでも贅沢は言っていられない。腹に入れておかないと他に食べる物はない。贅沢は敵だと言っていた赤木の姿を思い出した。

卓治の隣には誠太郎が座っていた。

彼は文句ひとつ言わずにマンネリ化した食べ物を口に運んでいる。いつも同じ味付けで彼も飽き飽きしている筈なのに、誠太郎はただ淡々と食べ物を口に運んでいる。その無感情さは、物を食べているというよりただ栄養を補給しているといった様子だ。誠太郎は動物的に食事をしているのではない。植物的に養分を体内に取り込んでいるだけだ。ただ生きる為に。

「美味しい、これ？」

卓治は思わず問い掛けた。すると誠太郎は微かな苦笑いを浮かべてから、美味しい訳ないやん、と小声で答えてくれた。

「それでも食べへん訳にはいかんやろ」

「やっぱりこれしか食べるもんじゃないから？」

「んん、まあそれもあるけどな」

矢張り栄養補給の為だけかと思っただが、誠太郎は卓治の考えてい

た事とは少し違う思いを抱いていたようだ。

「今、この国で食べる物もなく、腹を空かせて泣いてる子もおらんやで。それでも俺らは毎日飯が食えてる。そら量は多ないし、毎日同じようなもんばかりやけど飢え死にせんで済んでるだけ幸せやろ」

そう言つて誠太郎は火の通り切つていない硬いゴボウを大事そうに噛む。

「俺らは生き残るんが責任やねんで。戦いで死んだ兵隊さんの為にも、焼夷弾で焼き殺された町の人の為にも。だから俺らには食べ物を与えられねん。せやから文句言つたらあかん」

誠太郎の言う事に納得させられた。自分達はこの国の未来の為に生かされている存在なのだ。ぼろぼろになったこの国を立て直すのは自分達だと、卓治はふと胸の中で思った。

すると誠太郎は卓治に言った。

「そや、噂なつとんぞ」

「何の話？」

すると誠太郎はにやにや笑いながら卓治を見る。

「赤鬼殴つたらしいやん」

あれは、と言つて言葉が詰まる卓治。

今、赤木と今村は恭子を探しに森の中へ行っている。今は日が長い夏だと言つても、あと一時間もすれば辺りは真っ暗になってしまふ。恭子搜索は日没までが勝負だ。暗い森の中で恭子を探すのは不可能に近い。

「あれはアメリカや思てん。捕まったら殺されてしまふやろ。せやから無我夢中で腕振り回したんや」

「そしたら赤鬼やつたつて訳か」

そうやねん、と答えた卓治は自らの頭を摩った。赤木の拳骨を受けた所がまだ腫れている。

「根性あるやん、卓治」

誠太郎は卓治の脇腹を軽く肘で押した。彼も赤木と同じような事

を言つて卓治を褒めている。けれども勇気を振り絞つて攻撃したという感覚はない。もし一人であの状況に陥つていたとしたら、同じ行動をとれただろうか。卓治は考える。恐らくそれは出来ないだろう。一人ならひたすら逃げただけに決まっている。

多分、あの時チヅルがいたからだ。

ふとチヅルの方に目を向ける。彼女はただ一人で肅々と食事を口に運んでいる。消えた恭子の事を考えているのだろう。隣の子に話しかけられた時に、作つたような不自然な笑顔を見せるのが痛々しかった。

今朝、チヅルが腕を掴まれた時、卓治の腹の底で何かがぐつぐつと沸き立った。闘争心や勇気ではない、不安や恐怖とも少し違う、黄色と灰色を混ぜたような色味の悪い感情だった。

喪失感。強いて言えばそれに近い。

あの瞬間、卓治の中でチヅルという存在の半分が奪われた。彼女の存在は、まるで砂のように握つた指の隙間から零れていった。その時、泡立っていた卓治の感情は一気に冷やされ凍りついた。

まだ間に合う、チヅルを返せ。

気が付いたらアメリカ兵に殴りかかっていた、結局はアメリカ兵ではなく赤木だったのだが。勝ち目がない事は分かっていた。一歩間違えば殺される事も分かっていた。卓治は死ぬ事が恐くない訳ではない。ただ、チヅルを失うのは死ぬ事よりも怖いと思つたからだった。

チヅルの事が好きなのか。

しかしそれは卓治自身にも分からない。チヅルとは幼い頃からずっと一緒だったが、そんな事を考えたことは一度もなかった。少なくともチヅルが悲しむところはもう見たくない。それだけだった。

それにチヅルは誠太郎の事が好きなのだ。

今も彼女はちらちらとこちら、誠太郎に視線を送つては恥ずかしそうに顔を伏せたりしている。

「なあ誠太郎君、チヅルの事どう思う？」

どう思つて、と言つて誠太郎は首を傾げる。

「せやから、その。何て言つか。ほら、好きとか嫌いとか色々あるやん」

「ああ、そういう意味か。そやったら、まあ普通かな…」

誠太郎は照れ臭そうに言つた。彼は表情を誤魔化すようにゴボウを一切れ口の中に放り込んでぼりぼりと噛む。

この年頃の男子は異性を過剰に意識するあまり、過剰に拒絶する。誠太郎も例外ではなかったらしい。出来るだけ自分の感情を表に出さないようにして好きとも嫌いとも答えず、どちらでもない「普通」という回答を選択する。卓治自身もし同じ質問をされると同じ答えを返すだろう。

「でも優しい子やな、毎日良太の墓参り行つてんねやろ。俺も今度一緒について行つても良いかな」

もちろんや、と卓治は頷いた。

班長である誠太郎は男子達の憧れだ。皆に優しくて正義感も強く集団をまとめる統率力もある。そんな人が来てくれるとなれば良太も喜ぶだろう。そして一緒に行くチヅルも喜ぶ筈だ。次は誠太郎とチヅルの二人で墓参りに行つてもらおうか、とも卓治は考えた。

「あ、そう言えば」

ふと、思い出した事があつた。

「どうしたんや？」

「いや、この前俺とチヅルが六年の毅達に突つかかつて来られた時、誠太郎君が助けてくれたやん」

ああ、と誠太郎も首を縦に振る。

「何や、あの後また嫌がらせされたんか？」

「ちやうねん。そう言えば毅が変な捨て台詞吐いてたような気がしてな」

すると誠太郎は黙つた。

「たしか『正義の味方ぶつても結局は俺と同じやねんぞ』って。どういう意味なんやろ」

それは、と何か言いかけて誠太郎は口籠って箸を置いた。

突然誠太郎の様子が変わったのは卓治の目にも明らかだった。彼は額に汗を滲ませて俯いている。

様子がおかしい。卓治は怪訝な瞳で誠太郎の顔を覗き込もうとするが、彼はその視線から逃げるように不自然に顔を背ける。ますますおかしい。

いつもの誠太郎とは明らかに違う。

その時縁側で、がたと騒がしい物音がした。

「おーい、和尚さん。手当したって下さい！」

赤木の声だ。その太くて通る声は寺中に響き渡る。恭子を探しに行っていた二人の教師が帰ってきたのだ。手当という事は誰かが怪我をしたのだろうか、まさか恭子が怪我を負っていたのだろうか。皆の視線が縁側に向けられる。

太陽は殆ど沈んでいて、空は昼と夜のちょうど中間の紫色をしていた。障子の開け放たれた軒先に赤木が立っているのが分かった。そして縁側に誰かが寝そべっている。

今村だ。彼は苦しそうな表情で左肩を押さえている。押さえた手の間から赤く滲んだシャツの生地が見える。あれは血だ。それでも今村は、大丈夫ですよと無理に笑って周りを安心させようとしていた。

「いやあ、参りましたよ。迷惑かけてすみませんね赤木先生」

「アンタは黙って大人しくしとれ」

赤木は不意に子供達の方に目を向ける。

「おい、お前らは見るな！ メシ食ったんなら早く片付けでもしとけ！」

いつもよりどこか切羽詰まった怒号が飛ぶ。子供達は弾かれたように食事の後片付けを始めた。卓治と誠太郎は食器を運びながら目聡くもちらちらと様子を窺い、耳聡く聞き耳を立てている。どうやら戻ってきたのは赤木と今村だけで、恭子は一緒ではないらしい。すると住職が大慌てで包帯を持ってきた。今村のシャツを脱がす

と左肩に出来た生々しい傷が露わになった。ぱっくりと割れた傷口からはまだ鮮やかな血液が泉のようにこんこんと溢れ出していた。思わず卓治は目を背ける。

赤木は清潔な手拭で血を拭きながら傷口を観察している。

「結構深いな、明るい所で見て初めて分かったわ。しかもこれは木に引っ掛かって切ったような傷口やない。刃物や」

住職は手際良く傷口を消毒してゆく。薬草が沁みたのか今村は表情を歪めて身体を引き攣らせた。

「まったく、油断してしまいました」

一体何があつたんや、と赤木。

「米兵です。森の中で一人になった時出くわしてしまつたんです」

「何やと！」

森の奥のアメリカ兵は実在した。今まで姿を隠したまま、恐ろしい気配だけを撒き散らしていたものがついにその姿を現したのだ。

今村の言葉が聞こえた子供達は皆震え上がった。

「アメ公め、ホンマにおつたんか……」

「ええ、いました。恭子を攫さらった犯人だと思って取り押さえようとなりましたが、いきなりナイフで切りつけられましたよ」

今村は苦笑いを浮かべる。

「アホ、そんな時はワシを呼ぶんや」

「すいません、あはは」

力無く笑った今村は本当に悔しそうだった。

恭子が帰って来ないまま夜は更けていった。

チヅルは布団に潜り込んで震えていた。倫代、良太、そして恭子、自分の知っている人が次々と消えてゆく。やがて正和、誠太郎、そして卓治というように周りからどんどん人が消えてしまい一人きりになってしまふ。最後には自分も消えてしまふような気がして怖くなった。

自分は生きて街に帰れるのだろうか。

そんな不安がチヅルの小さな胸をきりきりと締めつけた。チヅルの頭にあるのはあくまでも最悪の状況で、恭子はまだ死んだとは限っていない。もしかしたら明日にでもひよっこり帰ってくるかもしれない。

ひよっこりと…。

確かに倫代はひよっこり帰ってきた、無残な死体となつて。ふと森の中に裸で打ち捨てられている恭子の死体を想像してしまったチヅルの背筋が凍った。その想像を払拭しようと頭を掻きむしり、何でも良いから楽しい事を考えようとした。しかし楽しい事など何も思いつかなかった。

疎開先では嫌な事、悲しい事が多過ぎた。楽しい事などおもいつく筈がない。そこでまだ街にいた頃の楽しい事を思い出そうとしたが、もう全部忘れてしまっていた。

それが余計に悲しかった。

すうつと襖が開く音がする。その刹那、口から心臓が飛び出るかと思う程驚いたが、もしかしたら恭子が戻ってきたのではないかと淡い期待を抱いた。

チヅルはそつと布団から顔を出した。

「眠れないのかい？」

そこには蚊帳を捲った今村の姿があった。彼はいつものように優しく微笑んでいる。

「今村先生…」

「おやおや、どうしたんだい泣きそうな顔をして」

今村は他の生徒を起こさないように忍び足でチヅルのもとまでやって来て、彼女の横に屈み込んだ。今村の腕には痛々しい包帯が巻かれている。

「先生、大丈夫なん？」

「ああ、心配してくれてありがとう。元々大した傷じゃなかったし、もう血は止まったから大丈夫だよ」

ちよつと痛いけどね、と付け足してお道化ながら彼は眼鏡を直し

た。

「チヅル、恐いんでしょ」

仰向けのままチヅルは小さく頷いた。もちろんアメリカ兵も恐い、皆がいなくなっていくのも恐い、戦争も恐い、死ぬのも恐い。チヅルの胸は恐いものが沢山詰め込まれて破裂寸前だった。

「ウチら、ホンマにみんな殺されてしまうんかな…」

「大丈夫、そんな事させないよ」

今村はそう言ってチヅルの頭を撫でた。

「ウチやっぱりこわい。めっちゃこわい。だって今朝まで一緒におった恭子ちゃんまでおらんようになってもうてんで」

「恭子だってまだ殺されたって決まってるよ。信じてあげるんだ、生きているって」

「せやけど…」

せやけど、とチヅルは繰り返して黙り込む。

さっき頭の中に浮かんだ恭子の死体の映像が再び浮かび上がる。自分も同じように殺されてしまうのではないかと考えると恐ろしくて眠れない。

「今夜は大丈夫。先生が朝までここで見張っているから」

何があっても君達は殺させない。今村はそう言ってチヅルの顔の上に優しく手を置いて目を閉じさせた。

チヅルはそのまま眠りに就いた。

後半

今日も蝉が大合唱している。

今村の算術の授業が終わった後、卓治達をはじめとする数人の子供達が寺の境内の井戸の周りに集まっていた。その中でも班長の誠太郎は神妙な顔をしている。

「どうしたんや誠太郎君」と正和。

「お前ら、今朝のラジオ聞いてへんかったんか？」

ラジオって何の事、と卓治が尋ねると誠太郎は真剣な顔で俯いた。そして彼は小さな声で呟く。

「ピカドンや…」

「ピカドン？ 何やそりゃ」

その間の抜けた響きから大した事ではないような気がした。腹ぺこの卓治はそれが美味しいお菓子のようにさえ思えた。しかし誠太郎の表情はどうも重い。

「新型の爆弾や。それが昨日の午前八時十五分、西の街に落とされた」

「なんや、爆弾か」

「そうや。たった一発で西の街が消えた。沢山あった工場も家も、住んでた人も、一秒もせん内に全部なくなってもうたそうや」

周りにいた子供達がざわめく。

「消えたってどういう事？」

「そのままの意味や。街が丸々一つホンマに跡形もなく消えてしもたらしいで。空がピカって光ったかと思ったらドーンと大きな音が鳴って、全部消えてしもうたんや。真下におった人らは影しか残らんかったらしい…」

そんな…と漏らした正和が泣き出しそうになっている。

「僕、西の街に親戚がおんのに。おじちゃんもおばちゃんも消えてしもうたんかいな。なあ、どうなんや誠太郎君！」

正和は誠太郎の袖を引っ張って顔を歪める。いつもは聡明な誠太郎も何も言えずにただ黙り込んで正和を見詰めているだけだった。それは後に言われるリトルボーイという原子爆弾。今までの機関銃や焼夷弾とは比にならない程の破壊力を持った科学という悪魔が生み出した大量破壊兵器だった。

「くそ、アメ公の鬼畜共め」

卓治は憎々しく吐き捨てた。

お前らもラジオ聞いたつたんか、と聞き覚えのある囁れ声がした。顰め面をした赤木がやってきた。隣には今村もいる。

「お前ら悔しいか、悔しいんやつたらその気持ちを絶対忘れんなよ。こんな事をしたアメ公共にいつか目にもの見せたるんじゃ」

顔を真っ赤にした赤木は本当に悔しそうに歯を食い縛っている。まさに今の彼は赤鬼のようだった。

「西の街は沢山の人が死んだ」と今村。彼は更に続ける。

「目瞬きをするほんの刹那で全てを焼き払ってしまった。今、この国にはそんなものに対抗する武器を持っていないんだ」

今村は悲しそうな目をして溜息を吐いた。

「いよいよ、この国は負けてしまうのかも…」

彼がそう漏らした瞬間に赤木が激昂した。

「アホな事言うなや！」

赤木は今村に掴みかかった。その勢いで今村のシャツのボタンが千切れ飛ぶ。そのまま赤木は力任せに今村の顔を引き寄せた。

「落ち着いて下さい、赤木先生！」

「負ける筈がないやろ…神国が、負ける筈ないやろが…」

赤木はそのまま頂垂れてしまった。

今日の昼食はいつもよりも重々しい空気が押し掛かっていた。

昼食は今までで一番粗末なもので、米の研ぎ汁の親戚のような雑炊と山菜のお浸しだけだった。本当に食べられる物なのかと疑いたくなるような粗末な山菜は、まるでただの植物の茎のようだった。

いよいよこの疎開地の食べ物も底を尽きてきたのかと思うと卓治は言いようのない不安に駆られた。

いつものように卓治と誠太郎は隣同士の席に着いた。しかしいつものような明るい話題は出てこない。それは彼らだけの話ではなく周りのどの子供達も同じだった。皆、アメリカが西の街に投下したピカドンを意識して、恐れている。

「誠太郎君はこの戦争がどうなると思う？」

そう問われた彼は直ぐに答えなかった。きつとすぐに答えられないのだろう。本当ならば「絶対に勝てる」と言い切りたいところなのだがその返答を何かが邪魔をする。それ程に新型爆弾の脅威は衝撃的だった。

「もしかで。もしも、戦争にこの国が負けてしもつたら…俺らはどうなるん？」

二度三度小さく頷いた誠太郎は答える。

「この国はお終いや。俺らは魂も誇りも全部奪われてアメリカの奴隷にされる。奪われて奪われて、更に奪われる」

「そんな酷い事されるんか…」

「そうや。卓治も南西諸島がどんな事になってるか知ってるやろ。本土決戦や。奴らは何の罪もない人達でも片っ端から撃ち殺してんねんで」

その地獄絵図を思い浮かべた卓治は口籠ってしまった。

「そんな奴らに支配されるんなんか絶対嫌や。誇りを奪われたまま生き続けるよりも、誇りを守る為に戦って死んだ方がマシや。俺はこの国が好きなんや。せやからこの国で生きてきた誇りを奪われるんは死ぬよりも辛い」

今の言葉を赤木が聞いたなら涙を流して喜ぶ事だろう。卓治もこの国が好きだ。だから誠太郎の言葉には首肯できる。

その時、二人の間にチヅルが割って入ってきた。

彼女は照れ臭そうに誠太郎から目を背けている。その手には山菜のお浸しの乗った小鉢があった。

「何やチヅル。赤鬼に見つかった引つ叩かれんぞ」

もじもじと視線を伏せるチヅルは小声で言った。

「ウチ、お腹減ってへんねん。せやからこれ食べて」

「アホ。食べれる時に食べとけへんかったら食べ物なくなっても知らんぞ」

「せやけど…」

チヅルはそう言つて俯いた。

そうだ。彼女は友達がいなくなつてしまいい心に大きな傷を負っている。不安で食欲も失つてしまっているのだろう。きっと彼女の腹は不安と寂しさでいっぱい食事の入る隙間がないのだろう。

「そつか、ほな俺が食べたるか」

卓治が手を伸ばすと彼女は「アカン」と言つて小鉢を遠ざけた。

そして顔を赤くして誠太郎の顔をちらちらと見上げる。

「誠太郎君に食べてもらおうと思つてんねん…」

すると彼女の顔は更に赤くなった。そしてチヅルはぎこちない手つきで誠太郎に小鉢を差し出した。

「ホンマに良いんか？」

誠太郎は戸惑っている。するとチヅルは小刻みに三度首を縦に振つた。

「せっかくやし食べたりや。ホンマは俺が食べたいねんけどな」

「そやな。親切で行つてくれてんねんしな。ありがとう、チヅル」

そう言つて誠太郎は彼女から小鉢を受け取り、一気に口の中へ掻き込んだ。チヅルはその様子をまじまじと見詰めている。

「ありがとうな、美味しいわ」

そう言つて誠太郎はチヅルの頭を撫でた。彼女は猫のように気持ちよさそうに目を閉じている。

「食べてもらえて良かったな、チヅル」

「うん！」

チヅルは花のように笑った。

更に暑くなつた午後二時。

卓治は誠太郎の代わりに井戸水を汲んでいた。誠太郎はとある事件で今ここにはいない。その代わりに卓治が彼の仕事を引き受けたのだった。

手の甲で汗を拭つた卓治は眩しそうに太陽を睨む。

昼食の後、彼はある計らいをした。良太の墓参りにチヅルと誠太郎の二人で行かせたのだった。最初は顔を赤くして照れていたチヅルだったが、恥ずかしそうに頷いて誠太郎と森の奥へと向かった。最近沈んだ顔ばかり見せていた彼女が嬉しそうにしているのを見て卓治は幸せだつた。こんな暗い時代だからこそ仄かな幸せを得るべきだと卓治は思う。

卓治が手拭で額の汗を拭いていると境内の方が騒がしくなっていた。

「赤木先生、落ち着いて下さい！」

今村の声だ。ふと目を向けると赤木の巨体を今村が必死に押さえていた。赤木は目を血走らせて今村を押し退けようとしている。

「どけ、もう我慢ならん」

「危険過ぎますよ！」

両足にゲートルを巻き、頭に日の丸の鉢巻きをした赤木は獣のように吠えている。帝国陸軍時代の血が蘇ったかのように赤木は目をぎらぎらと輝かせている。

「うるさい、お前はここまでされて悔しいんか」

「勿論そうですけども、一人で行くのは無茶です」

「アメ公はワシが殺したる。我らが神国の同胞達を虫けらのように焼き殺しおつて。絶対に許さん！」

赤木は今村の華奢な身体を突き飛ばして森の奥へと突っ走って行った。今村は赤木の名前を呼んでその場に立ち尽くしていた。

卓治は井戸水の入った桶を足元に置いて今村の方へ駆け寄って行った。今村も気が付いたようで、ふと卓治の方に目を向けた。

「先生、どうしたんや？」

「いや実は、赤木先生が昨日のピカドンの事で我を失ってしまったんだ。殺された神国民の復讐だと言ってね、この山に潜伏している米兵を殺すって言うて一人で行ってしまっただよ」

「復讐…」

そつだよ、と今村は困った顔をして首肯した。赤木の脳は筋肉と軍国精神で成り立っているらしく、悪い意味でも勇敢過ぎる。

今村はシャツの袖を捲り上げて森を睨む。

「僕が連れ戻してくる。危険だから卓治は絶対についてきちゃ駄目だぞ」

分かったね、と念押された卓治は今村の顔を見上げて小さく頷いた。すると「良い子だ」と言うて今村も森の中へと駆けていった。

置いて行かれた卓治はまた一人になった。

すると本堂の影から二人の男子が現れた。身体の高い方は実に愉快そうに下品な笑い声を上げている。

「何かめっちゃ面白そうな事なってるな」

毅と昭夫だ。毅は偉そうに腕を組んで卓治を見下ろしている。

「赤鬼達はアメ公捕まえに行っただんか」

「そ、そうやけど」

「もし赤鬼より先にアメ公捕まえたら俺らも英雄やな」

そう言うて並びの悪い歯を見せて笑う毅。そうやな、と言うて昭夫も頷いている。

「やめときや、相手はアメリカの兵隊やぞ。血も涙もないねんで」

なんぼ自分が喧嘩強い言うたかて勝てる訳ないやんか」

すると毅は卓治の胸ぐらを掴んで凶悪な目を向けた。

「お前、誰にもの言うてんねん！」

締めつける腕の力は強く、卓治が振り払おうとしてもびくともしない。頭が悪いやつに限って腕力がある。

「俺がアメ公に負ける言いたいんか。俺は喧嘩で負けた事がないんじゃ。ふざけた事言うとったらぶん殴んぞ」

「そんなん言うてへんやろ…」

すると毅は卓治を乱暴に引き離した。

「お前みたいな弱い奴はいらん。俺らだけでアメ公捕まえてきたるわ。よっしゃ、ほな行くで昭夫」

へらへらと笑いながら頷く昭夫。二人の六年はそのまま意気揚々と森の奥へと駆け出して行った。

「勝手にしろや」

卓治は独り言を漏らして足元の小石を蹴った。あんな勝手な奴らは勝手に死ねばいいとさえ思った。また一人になった境内で卓治は額の汗を拭う。

八月の蝉は相も変わらずうるさく鳴き続けていた。自分達がどんな状況に陥ろうとも虫達には何の関係もない。自分が死のうと生きようと、神国がこの戦争に勝とうと負けようと、彼らは関係なく鳴き続けるだろう。

しかし卓治は虫ではない。

自分だけ物語に取り残されるのは嫌だった。正直アメリカ兵は怖い。それでも卓治の好奇心と正義感はそのを上回った。気が付けば卓治も森の方へと駆け出していた。

蚊帳の外にされるのは嫌だった。

深緑は卓治を誘うようにさわさわと揺れる。まるで手招きしているような葉の揺らめきがいやに気持ち悪い。

来い、こっちへ来い。

山が卓治を甘く誘っているようだった。

一人で森へ入るのは初めてだった。いつもはチヅルと一緒に歩いている山道だが、一人で通るとどこか気味が悪い。毎日通いながれている筈の道でも、本当に正しい道なのかと不安になってしまう。

もし一人でいる時にアメリカ兵と出くわしてしまったらどうしよう。間違はなく無事では済まないだろう。最悪の場合殺されてしまう、倫代と同じように。卓治は姿の见えないアメリカ兵から逃げるように、そしてまだ見ぬアメリカ兵を追うように足場の悪い砂利道

を蹴った。

ざわざわと森が騒ぐ。空を覆い隠すように伸びた枝葉の下はまるで大きな生き物の体内に飲み込まれてしまった錯覚を感じる。不穏な空気を振り払うように、卓治は一心不乱に緑色の胃の中を駆け抜けた。

やがて開けた場所に出る。左にはいつも彼が寝そべって空を眺めている小高い丘があった。一人で来た所為か、いつもよりこの場所が遠く感じた。いつの間にか卓治は全身にびっしょりと汗をかいていて、シャツがべっとりと背中に貼りついていて。

卓治は深呼吸をして空を見上げる。今日も雲一つないうんざりする程に深い青空。しかし、いつもと違ってB - 29は飛んでいない。いつもと違う事が起こるような予感がした、それも何か良くない事が。

目の前には更なる緑の迷宮が待ち構えている。

卓治は再び深呼吸をした後、まるで海に飛び込む前のように大きく息を吸い込んで息を止めて森の中へと駆け出した。

この先には小さな集合墓地がある。良太が眠っている場所だ。集合墓地と言っても都市部にあるような広大な物でなく、渓谷の間を流れる川を見下ろせる見晴らしの良い場所に五つの墓石がひっそりと佇んでいるだけだ。

しばらくすると森の切れ目が見える。

例の墓地だ。

その前に誰か屈み込んでいる。見覚えのあるおかつぱ頭、チヅルだった。

「チヅル、どないしたんや！」

卓治が声を掛けると、彼女の小さな肩はびくりと引き攣った。そしてチヅルはゆっくりと顔を向ける。その顔は真っ青に凍りついていた。

「誠太郎君が……」

彼女は虫の鳴くような小さな涙声でそう言った。彼女が発する音

は震えていて、水に濡れたような繊細さを孕んでいる。彼女の足元に誰かが倒れている。

誠太郎だった。

うつ伏せになった彼は死んだように動かないと思ったら、時々小刻みに痙攣している。死んではないが、ただ事ではない。

「何があつた！」

チヅルの肩を掴んで軽く揺さぶる。彼女はちらりと誠太郎を一瞥した後、今にも泣きだしそうな顔で卓治の目を見た。

「あのな、ウチがお墓を洗う水汲みに川まで下りててんな」

彼らの足元で、誠太郎は目を見開いたまま痙攣し続ける。まるで陸に上げられた魚のようだ。

「戻ってきたら誠太郎君、後ろから石で殴られてた。でもウチな、恐くて何も出来へんかった」

「誰がやつたんや」

「よく分からなかったけど大きかったから男の人やと思う」

男の人。そう聞いて卓治の頭の中で一つの像が浮かんた。

「アメリカか」

「そんなんウチ、分かれへんよ」

チヅルは頭を掻きむしって誠太郎の胸に顔をうずめた。「嫌や、嫌や、死んだら嫌や」と彼女は悲痛な叫びを繰り返す。卓治は齒を食い縛った。

アメ公め、誠太郎君までこんな目に遭わせやがったな。卓治は胸の中でそう呟いて、しばらく待ってからチヅルに尋ねる。

「そいつはどこへ行った」

ひくひくと嗚咽を漏らすチヅルは手首で涙を拭いながら川の方を指差す。

「チヅルは誠太郎君を頼んだで」

小さく頷くチヅル。誠太郎はまだ生きている、早く手当をすれば助かるだろう。卓治はチヅルが指差した先を睨む。誠太郎を傷つけ、チヅルを悲しませた相手がどうしても許せなかった。

行ってくる、と言い残して卓治は再び駆け出した。

彼は十メートル程の急な傾斜を滑り降りて河原に降り立った。街を流れる川辺とは違って、ごろごろと大きな丸い石が沢山転がっている。気を抜いていると足を挫いてしまいそうだ。怪我をしているときに例のアメリカ兵と出会ってしまったらと考えるだけで背中が寒くなる。そうなると恐らく逃げる事すら出来ない。慎重に、しかし急いで卓治は上流に進んでゆく。

川の色は緑色に濁っていて底は見えず、一体どれぐらいの深さなのかも分からない。流れが緩やかでも底が見えないだけで不安になる。都会の工業用水で汚れた川とは違う濁り方だが、こちらの方がどこかこわい。

しばらく進むと緑色の川に不純物が混じった。水面に何かが浮かんで膜を張っている。それが油だという事は直ぐに分かった。

この先に工場でもあるのだろうか。

そう思ったが、こんな田舎に工場などある筈がないと直ぐに考えを改めた。しかしそうだとすれば一体何があるのだろう。卓治は水面に浮かぶ不健康な虹色に光る膜をちらちらと見ながら歩を進める。やがてその正体が明らかになった。

「何や、あれは」

卓治は目を疑った。

河原に灰色の戦闘機が墜落していたのだ。恐る恐る近付いて見てみると機体に星条旗の意匠が施されている。B-29ではないがアメリカの戦闘機だ。

噂は本当だったのか。

卓治は生唾を飲んで隅々まで確認する。翼が折れて、前方部のプロペラももげてしまっていた。頭から河原に突っ込んで逆立ちするようにして大破している戦闘機は燃料を出血するように川に流していた。

鉄の塊と化した戦闘機は長閑な田舎の山には似合わない過ぎた。

卓治が背伸びをして操縦席を確認すると、そこには誰もいない。

つまり、乗っていた兵隊は矢張りこの山のどこかに潜んでいるという事だ。振り返るとそこに残虐なアメリカ兵がいるような気がして卓治は薄ら寒くなった。

くそ、と叫んで卓治は両手で自分の頬を叩く。

自分はそのアメリカ兵を退治しに来たのに、何を今更怯えているのかと自分が情けなくなった。恐いなら最初から来るな、と自分自身を叱責した。

さあいつでも来い。卓治は胸の中で雄たけびを上げる。

その時、卓治の肩を誰かが掴んだ。

全身の汗が一気に噴き出す。もちろん全て冷や汗だと自身でも分かった。あまりの驚きに悲鳴すら出なかった。

心臓が狂ったように跳ねる。卓治の脳裏に死という言葉が過った。きつとこの後、背後から外国語が発せられ、自分は殴られ蹴られおもちやにされて殺されてしまう。

「おい、結局お前も来よったんか」

外国語ではない、卓治にも理解できる言葉だ。ゆっくりと振り返ると、そこに立っていたのはアメリカ兵ではなく、六年の毅だった。全身の力と一緒に魂も抜けかけた。

「何や毅か。アメリカや思ったやんか」

誰に呼び捨てしとんねん、と毅は卓治をきつく睨む。しかしアメリカ兵と比べるとこの毅でさえも可愛く見えた。

「昭夫も一緒とちゃうかったん？」

ああ、あいつか。そう言つて毅は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「昭夫はさつき腹痛い言うて帰ったわ。どうせ途中で恐くなって逃げたんやろな。ホンマ根性無いやつちゃ。それに比べたら一人でここまで来たお前はなかなか根性あるな。気に入ったわ」

俺の子分にしたらるか、と言う毅。卓治は苦笑いに似た愛想笑いを見せて適当に誤魔化した。

「見てみいこの戦闘機。俺らの新国軍が撃ち落としたんや」

毅はまるで自分の事のように自慢げに言った。

「パイロットの死体はない。つまり近くにまだ隠れてるって事や。ここは俺らが捕まえなアカンやろ」

毅は足元にあった棒切れを拾って素振りした。ついて来い、と毅は卓治に言い放つと棒切れを担いでさらに上流へと歩いて行った。毅の命令に従うのは気が進まなかったが倫代を殺し、恭子を攫い、誠太郎を酷い目に遭わせたアメリカ兵に復讐してやりたい気持ちもあった。

待つてや、と声を上げて卓治は傲慢な彼について行った。

俺と貴様は同期の桜、と軍歌「同期の桜」を放歌高吟し、棒切れを振りながら河原を歩く毅。その一步後ろを緊張した面持ちで歩く卓治。

確かに毅は強い。

体も大きいし、きつと喧嘩も誠太郎より強いだろう。しかし今、アメリカ兵と出会ってしまったらどうなるだろう。いくら毅が強かろうとこちらは子供二人で、相手は一人といえども戦闘の専門家だ。子供相手でも躊躇なく殺されるだろう。まだ恭子はどうなったか分からないが、現に倫代は殺されている。

恐らくアメリカ兵は空腹だろう。もし捕まってしまうえば、自分達は煮て焼いて喰われてしまうかもしれない。想像しただけで卓治は震え上がった。

ふと毅の歌が止んだ。

「お、あれは何や！」

そう叫んだ毅は棒切れで前方を指し示した。その先には川辺の岸壁にぼつかりと開いた洞穴がある。

「何やこれ、防空壕か。都会におる時に入った事あるけどこんな感じやったぞ。ちよつとでも喋っただけで恐い兵隊さんにどやされんのか」と毅。

卓治も防空壕の事を思い出した。

耳触りで不安を煽る空襲警報が鳴り響くと皆一斉に防空壕に駆け

込み、警報が解除されるまで暗い穴の中でじつと静かに待ち続けなければならぬ。

十分にも満たない短い時間でも死の恐怖はそれを長く引き伸ばして三十分にも一時間にも感じさせる。押し潰すように迫りくる死の圧力に耐えかねて叫びたくなるが、音を立てれば敵に見つかると言われ神国兵に殴られる。

卓治達の隣の町では防空壕内で泣き止まない赤ん坊が監督の兵隊に絞め殺されたという話を聞いたことがある。

容赦なく町を焼き尽くすアメリカ兵も恐いが、味方である筈の神国兵も恐い。卓治のような子供達にとって、この国はどこへ行っても地獄だ。

「でもこんな山奥に防空壕なんかあるのかな」

それは人工的に掘られた防空壕にしては形がいびつで、恐らく自然に出来た穴のようだ。近くまで寄って中を覗き込んだが暗くて何も見えない。それどころか中から真つ黒な闇が外の世界まで侵食していた。この闇は太陽よりも強い。

もつと奥まで覗こうとした卓治の足が止まった。

「どないした、入らへんのか？」

「うん。ちよつと下見てみいや」

卓治に促されて毅も足元を見る。

「何か落ちてんのか？」

「いや違うねんけど、何か人が通った跡みたいなんなつてへん？」

ほら、その石に付いてる泥も靴跡みたいやし」

近くにあつた丸石を指差して卓治は言った。どうもこの洞穴の前の小石だけが踏みならされているようで人が出入りしている形跡がある。

気の所為やろ、と言って毅は鼻で笑った。

卓治は上目遣いに闇の奥を覗き込む。明るいこちら側からは奥は見えないが、暗い向こう側からはこちらの様子がはっきり見えるだろう。

もしかすると闇の奥に潜む何者かが自分達の遣り取りをじつと観察していたのかもしれないと考えると背中が冷たくなった。こんな場所に潜んでいるとすれば例のアメリカ兵以外に考えられない。

「お前、恐いんか？」

毅はにやにや笑って卓治を見下ろしている。しかし卓治は毅を睨み、間髪入れずに言い返した。

「恐ないわ！」

嘘だ。

本当は今すぐ逃げ出したい程に恐い。死ぬのが恐いという気持ちと、倫代や誠太郎の恨みを晴らしてやりたいという気持ちが卓治の小さな胸の中で葛藤する。その中にはアメリカ兵を見てみたいという好奇心もほんの僅かに含まれていた。

毅は棒切れを固く握りしめて洞穴へ入ってゆく。深呼吸をした卓治も一歩遅れて彼について行った。

二人は暗闇の大口に誘い込まれていった。

彼らの足音が壁面を跳ねて穴の中を^{こだま}する。中は思っていたよりも広く、奥行きもそれなりにあるようだ。しかし、じめじめとした湿気と蒸し暑さは防空壕よりも酷くて眩暈^{めまい}すら覚えた。全身から汗が噴き出す。

外の光は徐々に届かなくなり目の前には完璧な黒が張り巡らされるようになった。

「毅…君」

先を進んでいた毅は「何や」と言って不愉快そうに振り返る。どうやらまた呼び捨てになりそうだった事が気に入らなかったらしい。「何も見えへんようになってきたやろ」

「だからどないしてん。嫌やったら帰ってええねんぞ」

「いや、そうゆう事やないねん。この先何があるか分からへんし、目が慣れるまで待つてから進んだ方がええで」

さんさんと輝く真夏の太陽の下を歩いてきた所、急に暗い洞穴に入ったので目が暗さに慣れていない。今は目の前にいる筈の毅の姿

さえ良く見えない。

「確かにそうやな」

毅の声が返ってきた。流石の毅も視界が全く利かない世界に難儀していたようだ。二人はじっとり湿った壁面に背をもたれさせて目が慣れるのを待った。

「お前、五年のくせになかなか賢いな。まあ俺かてしばらくしたら目エ慣れてくる事ぐらい知っとったけどな」

そう言って棒切れで卓治をつつく毅。卓治は適当な相槌を打ってやり過ごした。

卓治は今、あの恐るべきいじめっ子の毅と二人でいる。良く考えてみると妙な組み合わせだ。いざこうして動きが止まると会話に困る。

そう思いきや、毅は喧嘩の自慢話を延々と話し始めた。隣の地区の学校の一番強い奴をぶちのめしたとか、喧嘩では誰にも負けた事がないというような事を楽しそうに語っている。

そんな卓治にも毅に聞きたい事が一つだけある。この機会に聞いておけないだろうかと思いついて彼は自慢話に割って入った。

「ちよつと聞きたい事あんなんだけど、いい？」

「お、何の話や」

自慢を語れて気分が良くなったのか、毅は随分饒舌になっている。

「この前、誠太郎君に言った事やねんけどな、『正義の味方ぶつても結局は俺と同じやねんぞ』ってどういう意味なん？」

彼がそう言った途端に毅はにやりと笑った。

「それは秘密やな……」

何やそれ、と卓治は眉を寄せる。

「ホンマはみんなにも教えてやりたいねんけどな、ちよつと俺の口からは言われへんわ。誠太郎本人に聞いてみるや」

毅は実に愉快そうに笑う。

しかしその毅の表情が一瞬にして曇った。

「おい、それより何かさつきからずつとやねんけど変な臭いしてへ

んか。」

毅が口元を覆って言った。そう言われてみれば嫌な臭いがする。濡れた土とカビの臭いに混じって何かが腐ったような臭いが。

だんだん目が慣れてくる。

耳を澄ますと蠅の羽音がする、それも一匹や二匹ではない。不潔な空気に卓治は小さくえづく。

奥の壁際に何かがうずくまっている。

「おい、あれって！」

毅が上擦った声を上げた。

卓治はごくりと唾を飲み込んで、毅が指差した方に目を向ける。目が慣れてゆき、その正体がだんだん明らかになってくる。

「恭子……」

奥は恭子がいた。

正確には、恭子があつた。

恭子は、じめじめと湿った土の上に投げ捨てられたような格好で横たわっている。彼女は服どころか下着すら付けておらず、華奢な肢体を露わにしていた。手を後ろで縛られて自由を奪われ、その全身に殴られたような痛々しい青痣が浮かんでいる。

ヒマワリのような笑顔を作る彼女はここにはおらず、今の彼女の顔には絶望が永遠に貼り付いているようだった。恭子は無数に集る蠅に払う事すらせずによく終わった苦痛と、これから始まる無を受け入れようとしているようだった。

薄闇の中でその二つの瞳がぼうつと光ってこちらに向けられている。卓治達を見ている訳ではなく、卓治達の方を向いているだけだ。

恭子は死んでいる。

確かめなくとも見れば判った。

死。その感覚がじわじわと染み込むように伝わってくると卓治は急に怖くなった。あまりの恐ろしさに叫んでしまいそうになった。しかし先に叫んだのは毅だった。

彼の叫び声をきっかけに二人は発射された弾丸のように出口に向かって駆け出した。途中何度も転んで泥だらけになったが全く気にはならなかった。少しでも明るい所へ、少しでも安全な所へ、とにかく今は少しでも「死」から距離を取りたい。

そして二人は洞穴を飛び出してその場に蹲った。

毅は震える声で続ける。

「し、死んでた…。さっきの、五年の女子やろ」

「そうや。昨日いきなりおらんようになってた子や。恭子はチツルの一番の友達やったのに…チツルに何て言えば良いねん」

卓治の震えも止まらない。

「くそっ、アメ公め！」

毅は憎々しげに吐き捨てた。

何度も卓治は深呼吸をする。しかし何度頭を振っても先程の恭子の姿が振り払えない、目蓋の裏に焼きついたように目瞬きをする度に彼女の死体が見える。卓治は耐え切れなくなつてその場で嘔吐した。

「どうしたらええねん…」

卓治は滝のように流れ出る冷や汗をシャツの裾で拭いながら、そのまま頭を抱え込んでしまった。すると毅が言う。

「とにかく誰か大人に言わなアカンやろ。それから兵隊さんに伝えてアメ公捕まえてもらうんや」

ついさっきまで自分で捕まえると言っていた彼も考えを変えたようだ。死体を見て自分の手に負える相手ではないと分かったのだろう。それは卓治も同じだった。敵はあまりに恐ろしい。

一度、寺に戻ろうとしていた所に馴染み深い声に呼び止められた。「卓治、毅！　こんな所で何をしてるんだ！」

その声が出た方を見ると今村の姿があつた。彼は怒りに我を忘れた赤木を探して山の中を歩き回っていたのだらう、その顔には明らかな疲労の色が見える。

「先生…」

「アメリカ兵がうろろろしていて危険なのは分かっているだろ。それなのにどうして先生についてきた！」

今村が怒鳴るのは珍しい。彼自身、赤木とは違って怒鳴り慣れていないのか大声を上げるだけでかなり疲れるようだ。

「ご、ごめんなさい」と二人。

大きなため息を吐いた後、いつもの柔らかな笑顔に戻って眼鏡の位置を直した。

「とにかく、無事でよかった。君達はさつさと寺に戻っていなさい」先生聞いて下さい、と卓治が詰め寄る。すると今村は驚いたような表情で二人の顔を見比べている。

「どうしたんだい？」

「大変なんです。アメ公に恭子が殺されてたんです！」

「何だって！」

こつちや、と言って毅が今村の手を掴み、今村を連れた二人は再び洞穴の中へと飛び込んで行った。

これは、酷い。

そう呟いた今村は口元を覆って恭子だった物を見ている。恭子は相変わらず虚ろな瞳をこちらに向けていた。

今村は合掌し静かに目を閉じる。卓治と毅もそれに倣って手を合わせる。再び目を開けた時も恭子は死んでいた。もしかしたら違う現実がそこにあるかと思っただが、そんな訳はなかった。

「とにかく他にも大人を呼びに行かなきゃ。和尚さんに言って憲兵を呼んでもらおう」

さあ行こう、と今村が促す。卓治も頷いて洞窟を出ようとした。どこにアメリカ兵が潜んでいるか分からないので細心の注意を払って寺まで戻らなければならない。

「ちよつと待ってくれ！」

毅が叫んだ。

彼は洞穴の更に奥をじつと見ている。

「どうしたんだよ、早くここから離れないと危険だよ」

今村に手を引っ張られても彼はそこを動かさず。ただ視線を奥に向けてびくとも動かない。

そして彼は口を開く。

「奥に、誰かある……」

卓治と今村は怪訝な表情で毅を見ている。奥の方を見てもまだ目が慣れていないのでよく分からない。そして毅は更に言葉を足してゆく。

「誰か壁にもたれて座ってるで」

そう言っただけ毅は一人奥に向かった。

「毅、駄目だ。アメリカ兵だったらどうするんだ！」

今村は毅を追いかけて奥に進んでゆく。卓治はちらりと足元に目を向けてから、直ぐに目を逸らした。彼は恭子の死体から逃げるように彼らについて行った。

立ち止まっている毅の背中が見える。

「ちょっと待て、こいつは！」

洞穴の一番奥にはもう一つ死体があった。

腐敗が激しく所々白骨化が始まっていて、その死体が誰なのかははっきり判らないが、その衣服からはっきりわかる事が一つだけある。

「アメリカや……」

卓治はそこまで言っただけ言葉を失った。

腐乱死体はアメリカの軍服を着ていた。これが噂のアメリカ兵の正体だろう。近くに墜落してこの洞窟に姿を隠していた。噂は本当だった。

しかし、おかしい事が一つだけある。

「先生、じゃあ一体誰なんやるか」

その疑問点には毅も気が付いたらしい。彼はその風体に似合わず、顎に手を置き学者のような姿勢でものを考えている。

「誰って……何の事だい？」

「だってこのアメ公、腐ってるやん。一週間とか二週間でこんなならへんで。じゃあ今まで俺ら襲ったり、昨日先生の腕切ったやつは誰なんやるか」

全く同じ事を卓治も考えていた。

「本当だ！」

今村は驚いたように声を上げる。

「せやろ、このアメ公が出来るわけないねん」

毅の言葉に何度も深く頷く今村は毅の後ろに立ってアメリカ兵の死体を見下ろしている。

「なるほど、じゃあ他に犯人がいるって事だね…」

すると今村はポケットから拳銃を取り出して、毅の後頭部に押し当てた。

「賢いな、毅は」

今村が引き金を引くと甲高い破裂音と共に毅の頭が弾けた。どさりと音を立てて崩れ落ちた毅は何度も痙攣を繰り返す。

目の前で繰り広げられている事を俄かに理解できない卓治。今村が毅を撃ち殺した。理由や経緯はわからない。ただその事実が目の前に横たわっている。

今村が卓治に目を向ける。その瞬間、卓治の全身に警鐘が鳴り響いた。

逃げなければ、殺される。

優しい筈の今村の瞳は冷たい程に澄み切っていた。卓治は死に物狂いで恐怖に震える五体を動かし、太陽の光が差し込む出口へと駆け出した。

すると破裂音と共に足元の岩に火花が散った。卓治の足は凍りついたように動かなくなる。遅れて硝煙の焦げ臭いにおいが彼の鼻を刺激する。戦慄を堪えながら振り返ると今村がこちらに銃口を向けていた。その先からは白い煙が漏れている。

「卓治。君は毅よりも賢い子だから分かると思うけれどね」

毅の死体の傍らに立った今村はいつも通りの穏やかな口調で卓治

に語りかける。拳銃さえ向けられていなければ今も優しい先生だ。彼は更に続ける。

「見れば判るだろ、このピストルは本物さ。そこにある米兵の死体が持ってたのを貰ったのさ」

今村は眼鏡の位置を直してアメリカ兵の腐乱死体に目を向けてにこりと笑う。しかしその間も卓治に銃口を向けたままだった。彼は卓治に拳銃を突きつけながら悠々と洞穴の出口の方へと移動する。逃げ道は塞がれた。

「この疎開つてのは本当に良いね。何の楽しみもないこのご時世で最高の娯楽だよ。欲望を満たすにはもってこいだね」

「先生、何言うてんねん……」

卓治の頭は混乱していた。目の前にいるのがあの優しい今村なのかと自分の目と耳を疑った。それでも今村はいつも通りの笑みを絶やさない。真つ暗な洞穴の中、その傍らには恭子の死体があるのは異常だった。今村は裸の恭子を見下ろして愛おしそうに目を細めて微笑んでいる。

「倫代も恭子も、二人とも美味しかったな」

「もしかして、今村先生が二人を……」

すると今村の笑顔が歪む。今まで通りの笑顔なのだがその笑顔が醜く、そして邪悪に歪んだ。

「倫代は良かったよ。あの子は叩いたり蹴ったりする度に『ゴメンナサイ、ゴメンナサイ』って鳴くんだ。何も悪い事してないのに謝るんだよ。可愛い、本当に可愛かったよ。あまりに可愛かったから死ぬまで意地悪してしまったよ」

今村はいやらしく笑った。卓治に銃口を向ける彼は打ち捨てられた恭子を眺めながら恍惚としている。

「恭子も可愛いよね。あの夜、散歩に行こうって誘ったらにこにこしながら付いてきたんだ。裸にして手足を縛って蹴り転がしてあげるとね、芋虫みたいにもがくんだ。『信じていた今村先生がどうしてこんな事を』って顔で僕を見るんだよ」

何でそんな酷い事すんねん。卓治は歯を食い縛ったまま呟いた。すると今村は耳障りな高笑いを上げた。

「あはは、子供ばかりの閉ざされた世界。その中で大人の力は絶対的、神様みたいなものさ。神様は何をしても良いんだよ」

足元に転がる恭子の頭を踏みつけて今村は品のない笑い声を上げる。その姿は神などではない、邪鬼そのものだった。

「わざわざ自分の腕をナイフで刺してまでしてこの米兵の所為にしたんだ。まだまだ楽しむつもりなのに噂の米兵が死んでいるなんて知られたら困る」

悪いけれど、卓治にも死んでもらうよ。そう言つて今村が撃鉄を上げると閉ざされた空間に金属音が反響した。逆光で今村の表情は窺えないが、彼は満面の笑みを浮かべているような気がした。

「次はチヅルを可愛がつてあげるつもりなんだ。あの子、小さくて無邪気で可愛いよね。チヅルはどんな声で鳴くのかな」

今村はケラケラと笑っている。彼の頭の中で、既にチヅルは何度も犯されているのだろう。卓治の胸の中に汚い泥水が逆巻いた。

しばしの沈黙が湿った洞穴に充満する。チヅルだけはそんな目に遭わせたたくない、チヅルだけは何があつても守る。卓治が心の中で叫んでもどうにもならなかった。絶望的な状況は卓治の勇気を削ぐ。もう駄目だ。

自分はここで今村に殺される。しかし今村が上手く誤魔化して全てアメリカ兵の仕業という事になる。

そして、やがてチヅルも今村の手にかかる。

どんな状況になつても死を受け入れる事は難しい。もしかしたら助かるのではないのか、という虚しい希望が頭のどこかに過っている。しかし考察しても想像しても助かる現実を思い浮かべることが出来ない。結局自分はどうか頑張つてもここで殺されてしまうのかと卓治は泣きそうになる。

その時、今村の背後に黒い影が重なった。

死神か。卓治は虚ろな瞳で今村の背後の影を見詰めていた。自分

が殺された後、あれが魂を地獄に運んでいくのだろう。

するとその影は今村を羽交い絞めにした。一瞬驚いた表情になった今村を太い腕がぎりぎり締め上げる。

「誰だ、放せ！」

今村が声を荒げる。すると、誰が放すかアホたれ、と力強い声が暗い穴の中まで響いてくる。二人はまるで踊るように暴れていた。

「お前が…お前が殺しとったんか！」

それは赤木だった。

赤木は、まさに鬼のように顔を真っ赤にしながら今村の細い身体にしがみ付いている。その怪力に今村の顔が苦痛に歪んでいた。

「赤木先生…邪魔をするな」

「貴様、神国民でありながら同胞達を殺しやがって。絶対に許さへんぞ。非国民め、ワシが成敗したるわ」

その腕に更なる力がかけられ今村の顔が更に険しくなったかと思うと、再び耳をつんざくような銃声が響いた。

赤木の腕が解ける。その肩には黒い穴が開いていた。直ぐに鮮血が噴き出し、赤木は獣のような呻き声を漏らした。

「邪魔をするなど言ってるだろ！」

銃声が更に三発。

その全てを胴体に命中された赤木は咆哮上げてその場に倒れて動かなくなった。赤木の巨体が血の水溜りを作る。

赤木が死んだ。その一部始終を目の当たりにした卓治はぽかんと口を開けたまま立ち尽くしていた。

「まったく、余計な事をしなければ死なずに済んだのに。赤木先生も馬鹿な人だな。本当に軍人というのは脳まで筋肉でできているのか」

卓治は戦慄を抑えられない。

目の前にいる男は卓治の見ている前で何の躊躇いもなく無慈悲に二人も殺した、しかも今まで二人の少女を凌辱して殺しているという。

同じ人間とは思えない、悪魔だ。

きつと自分を殺す事にも何も抵抗を感じないだろう。今村は卓治を殺す事を既に宣言している。だから冗談ではなく、間違いなく、迷いもなく、卓治の眉間に向かって銃弾を発射するのだろう。

しかし卓治は兄、達郎の言っていた事を思い出した。

——アメリカのリボルバーは六発入りだ。

確か兄はそんな事を言っていた。卓治はここ数分の事を懸命に反芻する。殺の頭に一発、卓治の足元にもう一発、そして赤木に四発、計六発。

今村の弾倉には一発の弾丸も残されていない。

…逃げるなら今の内だ。

拾った拳銃なら予備の弾もないだろう。殴られようが蹴られようが何としても洞穴の出口を突破する。そしてそのまま寺まで一気に駆け抜ける。拳銃が使えないなら距離を取ってしまえば大丈夫だ。

それでも今村はナイフを持っているかもしれないが危険な賭けだがそうするしか卓治に生きる道はない。卓治が殺されてしまえば今度はチヅルが狙われる。卓治は覚悟を決めて今村を睨んだ。

すると今村は全てを見透かしたように嗤う。

「何なの、その顔。希望に満ち溢れた顔、氣に入らないなあ」

返り血を浴びた今村のシャツは赤い水玉模様を描き出している。

生白い肌には不気味なほど赤い色が良く似合っている。

「弾切れだと思っているんだろ。残念、弾も米兵が持っていたんだよ」

にやにやと笑う今村はポケットから鈍く光る弾丸を取り出して、慣れた手つきで弾倉に装填してゆく。頭の回転の速い彼は、こんな事態も予測して拳銃の扱いをこっそり練習していたのだろう。

終わった。

卓治の頭の中に絶望の二文字が浮かぶ。精一杯走って今村を突破しても背中を撃たれてしまうし、このままじっと待っていても銃撃の的になる事には変わらない。本当に八方塞だ。卓治は声に出さず

に色んな人に謝った。

倫代、恭子。ごめん、仇討たれへんかった。

誠太郎君。ごめん、俺たぶん殺されてまう。

チヅル。ごめん、ホンマに…ごめん。

齒を食い縛って俯く卓治。自分がこんなところで殺されてしまうなど信じられない。戦争に行った兵隊が「人の死はあつけない」と言っていた事が何となく理解できた。彼自身、ついさっきまで自分が死ぬなどと夢にも思っていなかった。

その時、大気を震わすような雄叫びが暗い穴に響いた。

「アンタ…まだ生きていたのか！」

今村が声を上げた。

ふと顔を上げると重傷を負ったはずの赤木が立ち上がり今村の腕を絞り上げている。しかしその身体に開いた銃創からどろどろと血液が流れだしていた。苦痛に顔を歪ませる赤木は自身に叫んだ。

「神国の男児はこれしきでへこたれへんのじゃ！」

今村は弾丸を地面にこぼしてしまった。好機と思った赤木はその太い腕を今村の首に回して背後から一気に締め上げる。呼吸を禁じられた今村の顔は紫色に変色し、爪で首にかかる腕を苦しげに掻き毟る。それでも赤木は力を緩めない。

やがて赤木は、今村をうつ伏せに地面に組み伏せて取り押さえた。赤木はまだ興奮しているのか、イノシシのような荒い鼻息を漏らししている。

「おい、お前は怪我してへんのか！」

卓治は慌てて「はい！」と返事した。

「そうか。もう大丈夫や安心せえ」

深く息を吐いてから赤木は意識の朦朧とする今村を憎々しげに見下ろす。

「まったく、今村め。とんでもないやつちゃ」

「あかお…いや、赤木先生。こそ大丈夫なんですか？」

ああ？ と答えて、ああ、と頷く赤木は身体に空いた四つの風穴

を見る。

「弾は抜けとるわ、心配いらん」

巨漢の赤木は今村の背中になんと腰掛けて自らのシャツの袖を千切り、傷痕に巻いて止血してゆく。幸い急所は外れていたらしい。赤木は落ちていた拳銃を拾って素早く弾を込め直すと、今村のズボンからベルトを抜き取り、彼の両腕を後ろで縛り上げた。

「おい、起きろ。いつまで寝とんねん」

銃口を今村のこめかみに突きつけた赤木は乱暴に今村の頭を揺さぶる。すると今村は苦しげに唸りながら目を開いた。

割れた眼鏡の奥の瞳は憎悪に満ちていた。その禍々しい光は卓治にも向けられ、その刹那彼は一歩たじろいだ。

「恭子と毅はこいつに殺されてしもつたんか…可哀想に」

「そうや。今村先生は恭子をいじめて殺した上に、俺の目の前で毅の頭を撃つて殺しよつてんや。それだけやない。倫代もや、倫代を殺したんもこいつなんや！」

この下衆が、と赤木が今村の髪の毛を掴んで顔を引き上げる。

「お前には神国民としての誇りはないんか！」

開き直ったようにへらへらと嗤う今村。言葉にならない怒号を上げた赤木は今村の顔を地面に叩きつけた。

「もつとやつたれ。こいつは誠太郎君まで殴って怪我させたんや。」

誠太郎君は今も苦しんでんねんぞ！」

今村は地面に顔を押し付けられたままふるふると震えている。笑っているのだろう。

「もうええ、卓治。それより今から寺までひとつ走りして和尚さんに憲兵呼んでもろてくれ。今村を憲兵に突き出すんや」

分かりました、と返事した卓治は洞穴を飛び出して行った。

赤木は気の遠くなるような苦痛に耐えながら今村の頭部に銃口を突きつけ続ける。血も随分失ってしまったているが、得意の根性で耐えていた。

「貴様も、お終いやな…」

そう言われても今村は力なくにやついている。

「卓治も意味の解らない事を言っていますね」

「何やと？」

また嗤う今村。その顔が気に入らない赤木は「何が可笑しいんじや！」と再び怒鳴った。すると、可笑しいですよ、と今村は言った。「だって僕は、誠太郎なんて殴っていませんよ」

誠太郎君…。

チヅルは生気のない声で彼の名を呼んだ。それでも誠太郎は地面に這いつくばったまま動くことが出来ない。時折苦しそうな呻き声を漏らす。

「チヅル…」

誠太郎は血走った目をチヅルに向けた。彼は瞳を動かすのがやっとらしく、立ち上がる事はおろか、寝返りを打つことさえ出来ないでいる。おかげで誠太郎の顔も泥で汚れきっている。

チヅルはそんな彼を見て優しく微笑んだ。

「効いてきたみたいやね」

誠太郎の横に屈み込んだチヅルは彼の顔色を確認している。

「上手いこと卓治君を誤魔化せて良かった。ちよつとでも誠太郎君の怪我を調べられたらお終いやったもんな。だって誠太郎君、どこにも怪我なんかしてへんもんな」

誠太郎の頭部には殴られた跡などない。チヅルは卓治に嘘を吐いていたのだった。誠太郎は口から涎よだれを垂れ流して醜態をさらしていた。

「卓治君が言うてた通りや、やっぱり鈴蘭は猛毒なんやな。生けてあった花瓶の水飲んだだけでも死んでしまう事もあんなんで。でも誠太郎君、美味しそうに食べてくれたから嬉しかったわ」

チヅルは含み笑いを見せる。

「さつきウチがあげた山菜のお浸し食べたやろ。実はあれ、鈴蘭の茎混せてあつたんやわ。美味しかったかな、鈴蘭のお浸し」

小石を掴んで誠太郎の顔に投げつけてチヅルは笑っている。彼女は何度も何度も石を投げつける。

「信じられへんやろ。だつてウチ、アンタの事好きなふりしてんから。ホンマに自分でも気持ち悪かったわ。アンタみたいなん好きや思われんのん」

全身に冷たい汗を噴き出している誠太郎は涙を浮かべて鯉のようにぱくぱくと口を開閉させながら何かを呟いている。

「はあ、何が言いたいんや？」

「み、みず…」

「水か。そんなに水が欲しいんやったら、ほな水飲ましたるわ」

チヅルはその小さな手で誠太郎の襟首を掴んでずると引き摺ってゆく。自分より大きな彼の身体を運ぶには随分と骨が折れる。

墓地の奥の傾斜まで誠太郎を運ぶと、彼女は立ち止まり川を見下ろした。

「ほら水やで」

そしてチヅルは坂の上から誠太郎を蹴落とした。誠太郎はまるで無抵抗な人形のように急な傾斜を転げ落ちる。その後を追ってチヅルも慎重に坂を下りてゆく。全身擦り傷だらけになつた誠太郎は河原の砂利の上に倒れていた。

「苦しい…チヅル…」

「うるさい。アンタに名前呼ばただけで吐き気するわ」

河原の丸石を拾って、それを誠太郎の頭に打ちつける。彼の額が割れて真っ赤な血が一筋流れた。

感情の窺えない無機質な表情の誠太郎の瞳はチヅルに向けられている。チヅルは拳を握りしめて、震える声で呟いた。

ウチ、見ててんで。

六月の雨の夜。

夕方から降り始めた雨は夜中になつてもしんと降り続けている。親のいない孤独さとむせ返るような湿気の所為でチヅルはなかなか眠れないでいた。

早く眠つてしまおうと無理矢理に目蓋をおろしても、木々の葉を叩く雨の音が邪魔をする。眠れない。チヅルは用を足そうと布団から這い出した。顔を上げると級友達は死んだようにぐっすりと眠っている。

昼間は元気に動き回っていた皆が一様に動かなくなっている光景はどこか気味が悪かった。まるで夜という魔物に魂を奪われてしまったかのような感覚だ。

皆を起こさないように静かに蚊帳を出たチヅル。

厠は本堂にしかない。彼女は再び級友達の寝顔を見渡してから襖を閉めた。ぎしぎしと軋む板張り廊下を出来るだけ音を立てないように慎重に歩き、真つ暗な中で手探りに自分の靴を履く。

冷たい雨が彼女の髪を、肩を叩く。

頭上に手をかざして、ぬかるんだ地面を小走りにゆくチヅル。十歩も進まない内に彼女の髪はしつとりと濡れそぼってしまった。雨は髪を伝い、首筋を這い、やがて彼女の胸にまで侵入してくる。夜の真つ黒な手に四肢を撫で回されているようで、チヅルは何か気分が悪くなった。

早く用を済ませて布団に戻ろう。

そう思つて駆けていると聞き覚えのある声が耳朵を掠めた。それは弟、良太の泣き声だった。

また家が恋しくなつて泣いているのかと思つてチヅルは良太の様子を見に行こうと思つた。しかし、その泣き声は男子が寝ている本堂の方から聞こえているのではないようだった。どこからだろうとチヅルは耳を澄ます。

それは本堂の脇にある物置小屋の方からだった。気になったチヅルが物置小屋に行つてみると僅かに開いた戸の隙間から朧げな灯りが漏れている。何故こんな所から良太の声が聞こえるのだろうか。

チヅルはこつそりその中を覗いた。

目を疑った。

中には三人の人影。一人は良太、そして六年の毅。毅は良太の髪の毛を掴んで床に叩きつけていた。

「おいチビ、お前每晚ギヤーギヤーうるさいんじや」

倒れた良太に追い打ちをかけるように毅は良太の腹を蹴った。口から涎を垂れ流す良太、その顔は涙でぐしゃぐしゃになっている。

「ごめんなさい、ごめんなさいと良太は繰り返す。

「お前の所為で俺らが寝られへんねん」

毅は良太の頭を踏みつけて楽しそうに笑っていた。その様子を見ていたチヅルは声も出せずに戦慄していた。

その毅の背後で誠太郎が腕を組んで笑っている。

「何やこいつホンマに根性あれへんな。男やったらちよつとは抵抗してみろや」

誠太郎は倒れた良太を見て鼻を鳴らした。そして誠太郎は押し入れから大量の布団を引き摺り出す。

「お、もしかしてアレか」と毅。

「ああ、布団蒸しの刑や」

にやりと顔を歪ませる誠太郎。やめて、と涙ながらに訴える良太を無視するように誠太郎は彼の上に布団を被せてゆく。

ゴメンナサイと叫ぶ良太の声が布団に遮られて小さくなる。

その上に毅の巨体が押し掛かり、良太は身動きが取れなくなった。言葉にならない良太の恐怖に染まった声が小さく漏れる。布団の中で必死にもがく良太、その上に更に布団を足してゆき誠太郎もその上に乗って良太を踏みつける。

「家に帰りたいやと？ 何を軟弱な事言うてんねん。お前みたいな奴は根性叩き直したらなアカンわ」

二人の六年は良太の上を何度も飛び跳ねて踏みつける。

雨に打たれるチヅルは恐怖に震えながら、眼球が零れてしまいそうな程に目を開きながらその様子を見ていた。やめて、お願いだか

らもうやめて。チヅルは心の中でそう叫び続けていた。

やがて布団は波打たなくなる。

「ああ、このガキ氣い失いよったんちゃうか。ホンマにしようもないやつちゃで」

鼻で笑った毅は布団を払いのけて良太の様子を確認する。すると布団の下から出て来たのは、もうチヅルの知っている良太ではなかった。

鬱血して紫色になった顔、恐怖に染まったまま見開かれたその両目からは涙がぼろぼろと零れている。何より彼は動かない。

「おい誠太郎：これ、もしかして……」

死んでんのちゃうん、と毅は続けた。

誠太郎はいつも以上に冷静な表情で動かなくなった良太の顔を触ったり、胸に耳を当てたりしていた。そして誠太郎は顔を上げる。

「ホンマに死んでまいよったな」

そう興味無げに呟いた。

「どうすんねん！」

動揺した毅がそう言つて固まつてしまった。しかしそれでも誠太郎は全く焦る様子はない。

「見てみい、こいつ怪我はしてないやろ。適当に心臓麻痺つて事にしたらええんちゃうか。寺には医者もおれへんねんからバレへんで」
そう言つて誠太郎は動かなくなった良太の身体を足で押した。

「なるほど、ええ考えや。やっぱり誠太郎は賢いな」

「そんななんでもええから、こいつ運ぶん手伝えや。本堂の布団の中に戻しとくんや。それで明日の朝、良太が動けへん言つて俺が騒いだるわ。そのかわり誰に何を聞かれても『知りません』言っねんぞ」

誠太郎は毅に良太を運ぶよう命令する。すると頷いた毅は良太の死体をぞんざいに担いでチヅルのいる戸の方へとやってきた。今まで金縛りにかかったように動けなかったチヅルは彼らから逃げるように、そして弾かれたように雨の降る中へと駆け出した。

殺された。

良太が、殺された。

チヅルは自分の寝どこへ向かつて雨の中を走った。雨は休む事無く降りしきり、チヅルの鼓膜を震わせる。耳が痛い、頭が痛い、吐き気がする。チヅルは濡れた服のまま布団に潜り込んで震えていた。目の前で良太が殺された。

震えて歯ががちと鳴る。しかし大きく息を吐いてから頭の中で状況を整理すると直ぐに自分がどうするべきか分かった。

誠太郎と毅を殺してやる。

チヅルは傷だらけになって河原に転がる誠太郎の背中を何度も踏みつけた。

「死ね、アンタなんか死んでまえばええねん！」

苦しそうに呻く誠太郎はみるみるうちに青褪めていった。鈴蘭の毒が更に回ってきたのだろう。彼は灰色の舌を見せながら痙攣している。

「お願いや…みず。水を飲ませてくれ…」

誠太郎は真っ赤に充血した目から涙を溢れさせながらチヅルを見上げている。彼が流す冷たい汗は河原の丸石をしつとりと濡らしていた。

チヅルは無表情に誠太郎を見下ろす。

「うるさいなあ。そんなに水飲みたいんやったら好きなだけ飲みや」
誠太郎の髪の毛を掴んで川辺に引き摺り、彼の顔を緑色の水の中に押し込んだ。チヅルは誠太郎の背に馬乗りになって頭を押さえる。もがこうとしても毒の所為で力が入らず、小柄なチヅルにも抗えないでいる。

「息が出来へんで苦しいか、もっと苦しめ。良太も息が出来へんで苦しい苦しい思いながら死んだんや」

緑の水にぶくぶくと泡が上がってくる。その空気と一緒に誠太郎の命も漏れ出しているようだった。もっと空気を吐き出せ、とチヅ

ルは心の中で叫びながら誠太郎の髪の毛を握りしめていた。

やがて誠太郎はその微かな抵抗すら止めた。チヅルが力を緩めても頂垂れたまま顔を水に浸けている。小さな泡も出さなくなった。

チヅルは静かに立ち上がり、動かなくなった誠太郎を見下ろしながら額に浮いた汗を袖で拭う。そして誠太郎の頭を踏みつける。彼女の足が押し当てられる度に緑色の水は波紋を作り小さな飛沫を上げる。それでも誠太郎はもう動かない。辺りにはさらさらと川の流れる音と蝉の声だけが響き渡っている。

誠太郎は死んだ。

チヅルは満足げに微笑む。

卓治は寺に向かつて河原を駆けている。

さんさんと照りつける太陽は彼の体力をじわじわと奪い去ろうとしているが、それでも卓治は懸命に走る。

アメリカ兵は犯人ではなかった。

信用していた今村が仲間を殺していた犯人だと思うと胸が痛んだ。信じたくない。しかしそれはもう真実として受け入れるしかない。

住職に伝えて憲兵を呼び、今村を拘束してもらう。それで全てが終わるのだ。もう誰も殺されることはなくなる。

もうすぐ良太の墓のある所に差し掛かる。そこに一人の少女の姿があった。チヅルだ。彼女はその場に俯いたまま呆然としている。そして、その足元には誠太郎が倒れていた。

「チヅル！」

彼女はゆっくりとこちらを向いた。卓治は彼女のもとに駆け寄って、虚ろな目をしたチヅルと動かないままの誠太郎を交互に見る。

「これは……」

するとチヅルはガラス球のような澄んだ瞳から一粒の涙を零した。その涙は止めどなく零れ続け彼女の頬を濡らす。

そしてチヅルは堰を切ったように泣き出して卓治の胸にしがみ付いた。

「誠太郎君が、誠太郎君が死んでしもうた…」

チヅルはまるで幼い子供のようにわんわんと泣きじゃくって卓治の身体に顔をうずめていた。

「ウチら、みんなアメリカに殺されてしまっんやろうか」

「もう大丈夫や、もう全部終わったんや。だからもう誰も殺されへん」

卓治は泣いているチヅルの頭を優しく撫でた。

ふと空を見上げる。今日も抜けるような青空が広がっている、どこまでも透き通った美しい海のような青空が。

またB - 29が西の空へ白線を引いて行った。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2793v/>

B-29の見える夏

2011年7月28日20時42分発行